

料たるなからんや即ち當時の會話を演述體に綴つて左に抄録す、特に括弧を附するものは氏が時々挿める日本語と知れ。  
 (知らぬが佛)と云ひますが、知らぬは全く列國の惡魔です、英國の現狀を御覽なさい、無智です、文盲です、多數の人民は全く自分の國力を知らない、ソリヤ成る程海軍は思ひ切つて擴張します、國會で議員が海軍擴張を騒ぎ立てる何故ですか？ポツケット主義で、自分の頭上に落ちかゝるからです、英吉利の國會で軍艦製造に反對などして御覽なさい、忽ち選舉區に歸つて人氣を失ふ、軍艦製造は取りも直さず、英國造船業者の繁昌で、造船業者の繁昌は、地方多數の労働者が活計の上に大影響を及ぼすのです、政府が軍艦をドシ／＼製造すれば、地方の人民は無數の仕事を得て喜ぶ、此度の政府は中々エライ、我區の選出議員は大したものだと持て囃される。  
 所が如何です、眞正に海軍を擴張するならば、御承知の通り、艦ばかり造

つても海軍擴張は出来ませぬ、是が精神たる乗組員は如何するのです、五ヶ年三千五百萬磅の製艦費を議決して、年々歳々無數の軍艦を造り、以て地方造船業者の囊中を肥やしても、是が精神たる乗組士卒は、一年や二年の速成にては得られない、此大切の乗組士卒を養成するには、少しも注意するものがない、イヤ注意するものはあつても、少しも費用を議決するものがない、何故ですか？議決したとて、誰も褒めない、喜ばない、否却つて、不用のものに大金を投ずると、地方選舉區の人氣を失ふのです、如何ですか、此無智文盲は。  
 又陸軍を御覽なさい、歩兵立派です、砲兵結構です、騎兵天下無双です、箇別々に別ちては、天下無雙の陸軍が、扱て敵に對して戦闘するとなる、と實に(奇麗なゴモク)です、何故でしやう？左様左様軍隊としての組織が悪い、ウエレスレイ卿の如きは、確に是を知らぬではない、けれども、英人は如何です、獨立は好むが、干渉は嫌ひだ、ナフニ是れでも、佛蘭西御坐



れ、獨逸御坐れ、露西亞御坐れ、如何なる敵でも立派に打ち破つて見せる、敵を破れば軍隊の役目はすむ、嚴格なる組織の干渉は御免を蒙ると云ふが軍隊一般の人情なのです、所が英國今日の位置は、露であれ獨であれ佛であれ、皆英國を敵にして激烈なる運動をして居るではありませんか、英國は少くとも二ヶ國以上聯合の敵を引受けねばならぬ、如何しても陸軍の組織を嚴格に行はずして此大敵が引受けられますか？國民の多数は一寸先は闇なので、無智文盲が英國の悪魔なのです。眼を轉じて露西亞を御覽なさい、是も矢張り無智ですな、露西亞果して己れの國力を知るならば、先づ國內を整理發達せしめて、而して後に國外に延びる、佛蘭西亦無智でしょう、露佛同盟は差し當り以て獨逸に當る積りでしようが、露佛同盟して兩國相互の利益を得て居りましょうが、佛蘭西の官民が露西亞に投じて居る資本金は如何でしょう、無慮三億磅！無慮三億磅！而して佛蘭西の利益は何處に在るので、佛國大

統領が露西亞に出掛けられた時、露西亞皇帝は、至極鄭重懇親を表する爲め、大統領の右の頬に接吻して、直ちに復左の頬にも接吻した、此二つの接吻の價値が三億磅！接吻一つが一億五千磅！如何に皇帝の接吻だとて餘りに高い！而して實際必要の起つた時露西亞は果して佛蘭西を助けるでしょうか、是は疑問です、何も露西亞人は皆不正直だと云ふのではない、併し露西亞の官吏が悪い、官服がいけない、官服着けた露西亞人で直正なのは、露西亞現代の皇帝ばかり。支那人の無智は云ふ迄もないが、世界列國の支那に對する無智を御覽なさい、數年前迄は如何でした、列國が支那に對する感情は、支那は宛然眠れる龍だ、今龍の眠れる間に、一撃二撃は加え得らるにして、發矢！此龍一度醒むれば、眠れる時に其逆鱗に觸れしもの禍なる哉。爾來數年眠れる龍は遂に醒めず、今後恐らく醒むるの時機はあります



まい、醒められては大變支那目を醒まして工業などを發達して御覽なさい、歐羅巴特に英國などは、何に依つて立つ事が出来ましよう。立ち戻つて英人が支那に對する無智を御覽なさい、獨逸が膠洲灣を占領した、露西亞が旅順を占領した、英吉利が威海衛を占領した、と云つて随分騒ぐ、矢張り英人も興奮劑が好きなのです、今日支那に分割の大亂が起つた様に騒ぐかと思ふと、明日ランカシアアとヨークシアのクリツケットでもあつて御覽なさい、忽ち人氣はクリツケットに移つて、支那は何處かへ消えて仕舞ふ、是れですもの、英人は支那に對して、無智文盲な譯ぢやありませんか。其所で御國の日本は如何です、失禮ながら矢張り無智、而かも二様の無智があるだらふと思ひます、抑も日清戦争の當時、東洋の事は東洋で済む、日清戦争は東洋政略で何處迄も行けると考へたなら、夫は即ち無智の起原です、今日の東洋政略は即ち西洋政略で、支那の處分は歐羅巴列

國の關係より割り出して來ねばならぬ、是は既に過去の事。今日と相成つて日本の無智には二種あつて、一は自國の國力を知らず、自ら世界の強國と列し、一己單獨に我意を貫く事が出来ると思ふ、強硬派、二は自國の國力を餘りに弱きに積り過ぎ、孰れの國にか依頼せねばならぬと心配する軟弱派、兩方共に無智の點は一様ですな、ナアニ心配する事は無い、日本は立派に單獨に往けるが併し中々我意を貫くなどは思ひも寄らぬ所、外交が非常に必要となつて詣ります。日本人！神經過敏ですな、外交家に必要の性質です、猜疑心が深い、是も必要、餘程狡猾です心の、中で怒つても、唯「ハイ、ハイ」と云つて笑つて居る、尤で「狸さん」ですな、是も非常に外交家に必要なのです、日本人は外交家に必要な總ての特質を先づ備へて居ます、所で立派な外交家が、ありますか「机上装置の青木子爵の寫眞を指し、青木子爵は立派な外交家です、子爵ならば歐洲人の考へる通りな事を考へ得られます、子



爵方一獨逸の成績宜しからざりしとならば、夫は少しも子爵が外交の  
技倆を輕重するに足らぬ、獨逸で成功したと云ふ公使が何處の國にあ  
るかです、獨逸皇帝の様な今日云つて明日氣の換る人に接するは、中々  
容易な事ではありません。  
外に日本の外交家に誰があるか、まあ能く考へて御覽なさい、第一言  
が出来ないでしよう、何か云ふと「エ、ウーン」でもちきつて、一分に一言  
十分に一語歸朝の後の外務省は大喜び「ヤレ」重荷を卸るす、是で  
外交の技倆が揮へそうな筈がない、第二少しも交際をせない、成る程官  
服を着けて役所には招かれる、歸れば直ぐに一室に閉ぢ籠つて少しも  
出ない、如何に外交の特質を備へた日本人でも、是れでは好い外交家  
出来そうな筈がないではありませんか。  
支那に對する日本の態度にも、矢張り無智の點はありはしますまいか、  
支那に對する西洋人と日本人を較べて御覽なさい、第一日本人は人種

を均しくし、第二宗教を同じくし、第三文字を同様にし、第四道路は近く  
入費は少ない、此四點の利益を占めて、日本人が支那内地の整理なり、其  
軍隊の組織なりを引受けて御覽なさい、其利益は如何でしよう。  
日本の目的は東洋の平和を保つ、英國の目的は支那の國權を保證する、  
共に其目的を均しくして居ると云つて宜しい所で、日英同盟の聲が時  
時聽えますが、是には二つの障害がある、第一雲の上には日本が知れ  
ない、年老いたる女皇にはサツパリ日本の事が解らない、是を解らそう  
としてもなか／＼ムツカシい、是女皇が日英同盟の條約に調印しよう  
など、は、とても想像が付きませぬ、ナニ皇太子殿下の御漫遊あらまほ  
しトナ、夫は至極結構な事です、殿下でも御漫遊になつて殿下より宮内  
の皇族方に御話しあれば、英國宮内に日本を知らせる爲には此上もな  
き好機會でしょう、日英同盟の反對論者は何と云つて居ますか、「非基督  
教國なる野蠻の日本と同盟など、は思ひも寄らぬ、忽ち一言の下に跳



ね付けられる。此宗教の違ふと云ふ事が第二の困難で、非基督教國の一  
言はナカク強い、土耳其の苦しむ所は即ち此一言なのでしよう併し  
ながら東洋刻下の風雲は時機既に迫つて日英若しくは日露孰れかの  
同盟を生み出す可き域に進みつゝある。此時に當つて日本が若し一步  
を誤り、日露同盟の方向などに進むが如き事あらば、夫は神佛より惡鬼  
が怖い、だから神佛より惡鬼を拜むと決心した古昔の蠻人に似たる恐  
を學ぶ事になりましよう。此一點は何卒日本の無智を啓發して、深く後  
來を警戒せねばならぬ儀と存じます。

私が日本人に就て深く感心致しました事は、彼の富士艦の時にして、下  
士卒の上陸に當つて副長が是れを戒しめ「お前達は日本人でない、一人  
一人日本だよ、お前達の爲る事は即ち日本が爲る事になる、必ず能く氣  
を付ける」此一言で皆神妙でした、是が實に得易からざる高貴の心掛で  
す、英吉利の水兵が佛蘭西の海岸に着いて、其士官が「お前達は英吉利人

でない、一人一人英吉利だよ」誰聽く奴があるものですか、其所で對等  
條約内地雜居の海岸に到着したる日本艦！是が艦長の號令と諸共に、  
一人一人の日本人は悉く外人に對して日本國を代表するの精神を以  
て世界列國の間に、日本既得の光榮を輝かされん事、最も日本と日本人  
の爲に切望に堪へぬ所でありませう、思ひ出した様に慌てゝ時計を見な  
がら「オヤ、四時です、サア如何ぞ私の書齋にお出で下さい、マイ、デヤ  
ア、水田さん！お茶でも差上げて、目下私の著述中なる、日本、支那、朝鮮三  
國の現在及未來記、即ち極東問題ですな、此原稿を一つ御覽を願ひまし  
よう。

### ○日英同盟論の主唱者を訪ふ

五百年來連綿たる大英の名家、ウオーターアフォード先侯の第二子現侯  
爵の正繼者をチャールズ、ベレスフォード卿と云ふ、千八百四十二年に



生れ幼より身を海軍に委し千八百八十二年軍艦コンドアの艦長として、アレキサンドリアの砲臺に加はり、後ウルスレイ卿のナイル遠征を輔け海軍陸戦隊長としてアフクリ、アフケル、メテメの諸戦に大功あり、特に勇敢の軍功を賞せられて勳章を授けらる、ウエルス親王並に女皇の侍従武官を経、千八百九十七年海軍少將に榮進し同九十八年ヨーク市より推薦せられて第三次の國會議員たり保守黨の首領株として、海軍事項の著述家として政治論者の躍起組として到る處に歓迎せらる、是を現時英國に於ける日英同盟論の主唱者となす。

一日ベレスフォード卿と約して卿とポルトマンスコヤアの邸に會す、ハム、コンモンに於ける卿の公園門館は知らず、ポルトマンスコヤアの控邸は尋常一様寧ろ狹隘なり果して是れかと訝かりつゝ、豫期の刻限に剎析せば、戸口靜かに開けて、身を軍服軍帽に固め胸に勳章を輝かして、恰も高等旅館の番人然たる守衛出で、恭々しく一室に請ず秘書ロビ

ン、グレイ氏の先導に従ひ廊下を歩めば、幽かに卿の令嬢等にやあらん、異國紳士の風貌如何あらんと覗ひ望むものあるを認む、廊下の歩み長からず、悠然客間に打ち通れば、身幹高く肥え太りて、滿面鬚髯なく頭髪薄く恰も我醍醐侯爵の肥えたるが如く、星公使の高きが如き一箇の紳士、身に鶯色の背廣を纏へるが、筆紙を机上に投じ來つて余を迎へつゝ、いと熱心に握手せり、是ぞ即ちベレスフォード卿にして、秘書グレイ氏は側子の椅子に退き、談論中靜かに茲に控へたり。

寒暄の挨拶終る、問ふて曰く「卿が倫敦商業會議所より頃日受けたる支那視察の役目の途次、我日本は卿を歓迎するの榮譽を有し得ざる乎」と、卿が埃及戦争に拔群の功名を揚げし當時の風貌も斯くやありけんと思はるゝ、勇威の顔は直ちに一團の微笑を双頬に堪へて固く結べる、卿の口唇は忽ち開き、深く余が熱心の一言を、日本人の戀情として謝し、且つ喜び、余を導きて一脚の椅子を與へて膝と膝とつき合はせ、眼と眼を



睨み合はせたる天下大勢の談論殆んど一時間に渉る。卿が軍人的簡潔の一言一句は言々肺腑より出で、包まず飾らず、恰も赤誠を人の腹中に措くの概あり、余が滿腔の質疑は口を衝いて出で、卿が斷乎たる胸臆の意見は、余が質疑に應じて溢る、談論相錯綜前後時に公にするを避けられし點鮮なからず、即ち前後錯綜の次序を正し、公判を避けられし諸點を刪除し、左に卿が當時談論の一斑を抄録せん。下院の總理バルフォア氏は云ふ、支那の現狀は千古未曾有開關以來の世界歴史に先例なし、余是に同意なり、殖民大臣チエンバレン氏は「悪魔と食卓を同うせば、長大の食匙を要す」と説く、余是に同意なり、悪魔は何ぞ、露國是れ也、露國と支那に食卓を同うするもの須らく長大の食匙を準備せざる可らず、長大の食匙とは何ぞ、大砲是れに外ならず。露國侵略の勢力は、侵々乎たり、滔々乎たり、水の低きに就くが如く、酸類の萬物を腐蝕するが如く、常に障礙の強きを避けて、最も抵抗の少なき

所に進む、一歳にして成らざんば五歳を期し、五歳にして能はずんば十歳二十歳を待つ、特派の公使軍將奏功せざんば、罪を彼等に歸して召還し、彼等成功せば、是を政府の命令として漸行す、黒海に出で、土耳其に防がるゝや、中央亞細亞を征服して印度に下らんとし、パミル、亞刺比亞、アフガンに利あらずと見るや、銳鋒忽ち北に向ふて四百餘州を席卷せんとす、看よ西北利亞鐵道落成の曉は、滿州是が勢力の下に落ち、サマルカンド、北京鐵道落成せば、蒙古西藏刃に劔らずして併吞せられん、唇破れて舌塞し、朝鮮に於ける日本の勢力、揚子江沿岸に於ける英國の勢力、能く此時に當つて露佛の侵略を理退し得可しと爲す乎。否々日本獨力露佛の侵略を制し得ず、英國獨力露佛の侵略を防禦し得ざらん、而も日英兩國は國防自衛と商業利益上、露佛の侵略を防ぎて、支那の獨立鞏固を維持せしむるを以て、兩國共通の利益と爲す、茲に於てか日英同盟の議論起る。



余が倫敦日本協會其他のヂンナアに於て「日英兩國に遠からずして、一層親密に進行せん事を熱望す、英國民は常に敢爲、冒險、決斷を愛す、而して日本は近時數年來是等の氣象を天下に公表せり、又商業に關しても、日本は全く英國の如く、既に東洋の大商業國として是が國是は我英國と均しく領土占有に非ずして、自國を利する商業貿易を保護するに在り、而して日本の海軍は英國の長所を學び、東洋無双の海軍根據地を專有し、日本の陸軍は大陸列國の長所に倣ひ、是が組織は英國よりも數多の長所を有す、されば此大目的を均しせる日英兩國にして、東洋に相提携同盟せば、一は日英兩國相互の利益の爲めに、二は世界平和の爲めに大利益なり、東洋權力の平衡、世界平和の維持、極東に於ける商業貿易の發達進歩は、期して待つ可し」との趣旨を以て、我英國民に日英同盟の議を主唱したるは、貴下も亦能く是を知らん。

國民に唱道するや、然り余は日本國民に對して云はん、支那分割と露佛の侵畧は、斷じて英國國防商業共通の利益に反す、而も露佛の同盟固く、英國獨力能く是を支ふる能はず、依つて英國は自己英國の利益の爲に、日英同盟の議を唱道せり、日本は國防並に商業上より打算して、支那分割と露佛の侵畧を利益とするや如何、無論利益とせざる可し、而も露佛の同盟に對して、獨力能く是を遮斷し得るや能はざる可し、果して然らば日本は自己日本の利益の爲に、日英同盟に加擔せよと、一派の僻論家は云ふ、日本は非基督教國なり、日英同盟は非基督の感情に妨げられて成り難しと言語同斷。

明目張膽世界刻下の大勢を通觀せよ、武力財力の勢力は今や其絶頂に達し、正義公道全く泥土に委し塗れ、利己益我の精神こそ、獨り列國の異同和戰を支配する今日に於て、日本假令非基督教國なればとて、英國之が感情に制せられて、日英同盟を妨ぐ可しと、貴下思ふや、余の日英同盟



を主唱するは、英國自己の利益の爲に之を唱道せり。日本假令非基督教國たりとて、佛教神道、婆羅門、マホメット、モルモン、宗たりとて、夫は決して問ふ所に在らず。日清戦争に於ける豊島並に旅順の虐殺は、之を文明の程度より論じ之を西米戦争の實況に比して、或は日本軍人道徳の標準を、泰西諸國の夫等よりも低しとせん。貴下亦之に同論ならん、されど是等は漸じて日英同盟に些の障礙を與へざるは、余之を日本國民に保證するに踟躇せず、何となれば日英同盟は、感情徳義の點より漠然として湧き出でたるに非ず、確乎たる日英兩國自己相互の實利實益上より打算し來りたるものなれば也。

余は臆而なく、是を貴下と日本國民に公言す。日本國民は東邦問題露佛侵略問題に對して、日英同盟を日本自己の利益と思惟せば、速かに日英同盟に加擔せよ、之を日本自己の利益に非ずと思考せば、漸じて日英同盟を語る勿れ、列國現時外交の蘊奧は、獨り自己の實利實益如何あらん

と顧みる而已、而も樽俎の折衝は是を飾るに、好言令色、美辭厚禮を以てせり、實に外交家のみに非ず、一般の國民は、須らく自國の利益如何を顧みて、外交問題に處するの覺悟こそ深く骨銘せざる可らず。

歴史未曾有の悲境に沈倫せる支那の獨立を維持誘掖して、露佛の侵略を妨遏するは、確かに英國の利益なり、確かに日本の利益なり、而も日英兩國獨力以て、露佛の同盟侵略に敵する能はずとせば、日英同盟以て之を支障するは、是れ亦確かに兩國相互の利益に非ずや、日英同盟以て露佛の侵略を防止するの良策如何、他なし、第一着の實行手段は、日本陸軍以て支那の陸軍を訓練し、英國の海軍以て支那の海軍を組織するを急務と爲す、支那陸海軍今日の狀態にては、日英同盟猶且つ露佛の侵略を保障するに難し、故に日英同盟第一の働作として、之を天下に公表するは、日英兩國支那陸海軍の訓練を分擔し、日清英の三國同盟以て、露佛の侵略を防禦斷念せしむるにあらん歟。



支那の獨立を維持する良策は、今日の狀勢列國競ふて、其財力の運用を  
支那内地に試みんとせり、世界列國の資本沛然支那の内地に漲ぎ、列  
國始めて各自相互の利益上より、支那分割を實行せば自己傾注の財力  
全く其利を失ふを悟るに及び、支那獨立の鞏固は列國相互の實益上始  
めて互に觀望の念を絶つに至つて行はれん歟、されど目下焦眉の急は、  
坐して此萬一を僥倖するに在らず、斷然進取日英同盟を天下に號呼す  
るに在り、米は必ず獨は恐らく馳せ加はらん、露佛復何事をも爲し得ざ  
る可し、余は日本國民に向つて熱望す、日本自己の利益併せて世界平和  
の利益の爲に、日英同盟を實行せよと。  
されど英國は貴下も知らん、常に單獨主義を守つて、容易に他國と同盟  
せず、我利益の爲に一時他國と同盟すとも、其利益一度去らば、直ちに元  
の單獨に馳せ歸るは、既往の歴史之を證す、貴下亦必ず是を認めん、是れ  
英國の長所復短所也、グラッドストーン翁一度去つて、英國改進派統一

を喪ひ、保守國民兩黨の聯合隱固なる以上は、今後暫らく現内閣の繼續  
を見ん、而も聯合兩黨議論の岐るゝ所は、保守黨首領サリスバリー卿の  
單獨主義と國民派チエンパーレン氏が同盟主義の衝突に在り、此衝突  
や露清の關係急なるより、日英同盟主義に歩を進めざるはなし、噫英  
國に於ける日英同盟の時機は、今や將に英國自己の利益の爲に熟し來  
つて千歳一遇の好機を見んとす、知らず日本に於ける日英同盟の氣運  
は、日本自己利益の爲に果して熟し得可きや如何に。  
卿の言辭は、古名將の號令の如く、簡潔にして一言一句荷くもす可らず、  
余の秃筆は、簡工の名手の如く、冗長散漫枝葉に涉るもの多し、談論前後  
し時々公判を避けられしものを省く、特に卿は英國の自己の利益の爲  
に是を談じ、余は日本自己の利益の爲に是を録す、豈當時相互の談論を、  
精緻詳密に描出するを得可んや、讀者幸に余が抄録する所に依つて、卿  
が眞意の存在する所を探究するに資せば可なり。



今より十年の一昔に於て『喜望峯に鐵壁を築き之を守るに精兵を以てせば、大英國は以て世界を笑倒せん』と壯言したる此チャールズ、ベレスフォード卿をして、今や即ち此言を爲さしむ、轉た時勢の變遷を感ずると共に、大英國論の如何に東邦問題に傾注せるかを想ふ可し。談論陸海軍事に渡り、歩々佳境に入つて混々盡きず、而も卿は來週早々支那視察の途に就かんとせる恍惚の瞬時、心なく是より以上を空費せしむるは禮に非ず、即ち卿が贈與の寫眞並に記名を受け、支那視察後の再會を約して別る。

余は特に卿の日本漫遊を、及ばん限り勸め置きたり、泰西政治家は東邦政治家に異なり、好意歡迎の厚薄多少に依つて、其持論を左右せずと雖ども、英國女皇即位式の當時、倫敦市民が佛國特派大使ソルト將軍を、喝采歡呼せるの聲は、深く將軍を感激せしめて、英佛後に事あらんとするや、將軍は『余はトールースに至る迄、英人を戦場に見て、戦時の英人を知

り、又倫敦に平和の英人を見て、平和の英人を知る、倫敦市民がソルト萬歳の聲は余を駈つて英國並に英民の黨派たらしめたり』とてギゾーと共に英佛の葛藤を調停したる佳譚あり、幸にしてベレスフォード卿支那視察の途次、我日本に漫遊するあらば、我日本と東京市民は、日英同盟と然らざるとに係らず、及ばん限り大英並に卿の萬歳を祝して可なり、倫敦市民歡呼の聲はソルト將軍をして英國に心酔せしめたりとせば、東京市民萬歳の聲、豈にベレスフォード卿をして日本に心酔せしめずと謂はんや。

○毎日電報の主筆を訪ふ

(其一)

倫敦の新聞街と稱せられたる、フリート街の中央に宏壯美麗の本社を



構へ、輪轉大機七臺を備へ、使役の人員無慮五百、發刊紙數は四十萬、以て世界一の普及新聞と誇稱するもの、是れ倫敦の毎日電報に非ずや。倫敦の新聞街と稱せられたる、フリート街の中央に、宏壯美麗の本社を構へ、輪轉大機七臺を備へ、使役の人員無慮五百、發刊紙數は毎夕一葉、以て世界の奇譚たるもの、是れ倫敦の夕刊電報に非ずや、四十萬の毎日電報と、僅々一葉の夕刊電報が、同一の本社同一の人員同一の輪轉機より印刷せらるゝもの、是れ毎日電報の普及を模し、夕刊電報を發刊するものあらんを恐れ、是が模擬を遮斷せん爲め、夕刊電報の空名を擁護するものなるを想は、以て毎日電報が如何に普及を誇るかを知らん。

毎日電報發刊以來の元勳記者二あり、一を世界の新聞記者王と稱せられたる、デヨージ、オーガスタス、サラと爲し、他をサア、エドゥ井ン、アーノードと爲す、サラは逝けるもアーノードは存して、今猶毎日電報の主筆たり。

サア、エドゥ井ン、アーノードは、千八百三十二年六月を以て英國グレイブセンドに生れ、今より四十五年前オキスフォート大學を卒業し、バアミンハム並にボンベイ校の教授を経て、世界十二ヶ國の言語に通じ、毎日電報の論説及文學欄を擔當する、殆んど四十年に近し。

漫遊者としてのアーノードは、暹羅の白象勳章、日本の旭日勳章、土耳其のオスマンリ勳章、波斯亞の旭獅勳章を拜受せるにて知らる可く、日本心醉家としてのアーノードは、客臘我仙臺の黒川玉子と第三次の結婚式を挙げ、「日本の婦人は天使の如し」と謳ひしに依つて察す可く、詩人としてのアーノードは、『世界の光』、『亞細亞の光』を以て著はる。

英國現時生存の詩人は、ブローニング、テニソンの衣鉢を傳ふるものなく、恰も群雄割據の奇觀を呈し、スウ井ンバンの音調遒勁豐富なる、モリスの章句優美麗麗なる、アーノードの着想奇警、別天地に獨歩せる、園秀



詩人ローセッチ、イングローを併せて、遙かに現代詩宗オースチンを凌駕せしなり、されば詩宗テニソン去つて、スウフィンペン、モリスと共に詩宗の人爵を抛ち、アーノード是が候補に數へられしも、月桂冠は遂にオースチンの頭上に落ちて今日に至れり。

人はアーノードを評して、虚傲不遜の俗詩人と云ふ、されど英國內地アーノードを崇拜するの人士亦乏しからず、余が大英内地の漫遊を企つるや、毎日電報社にアーノードを訪ふて、知人紹介の書状を求む、アーノード刻下に筆を執つて、一通の紹介状を草す、見れば封皮に水田氏を紹介すと書し、内に『高等教育ある東洋有望の文學青年、水田榮雄氏を歓迎するの人士には、サア、エドゥフィン、アーノード親しく之に鳴謝す可し』云々どあり、余が依囑漠然たりしも、アーノードの紹介状亦漠然たり、宛名なくして、寓人に宛てし一通の人相書、余大に是を啣んで、深く行李の底に藏す。斯くて地方漫遊の一日、談アーノードの結婚に及び、始めて彼の

人相書を示すや、地方人士嘆稱措かず、余を稱して東洋高等の文學青年と爲す、余敢て當らず、蘇人即ち曰く、『サア、エドゥフィン、アーノードは大英現時知名の詩人なり、彼は女皇の勅を受くるも曲て一言一句を虚飾するものに非ず、而も貴下を介して東洋高等の文學青年と爲す、貴下豈是に當らずと謂はんや』と余是に於てか、アーノードが詩人としての眞位を知る。

一日アーノードを倫敦の廻町とも稱す可き南ケンシントンポルトン園の三十一番館に訪ふて、日英同盟に對する氏の持論を敲く、座に一株大和の女郎花あり、サア、アーノードは古稀に近き高齡を以て、頭髮鬚鬚白銀の如く、老いて益す壯んなる、槐栢の容貌を具し、目下脚痛を疾めり、とて看護婦に縫りて歩むの状は、恰も亭々たる松柏の矗立せるに似たる可く、アーノード勳爵夫人が机に凭つて前後七年の洋行殆んど半ば忘れたる日本語を話すに、惱み、三十前後アーノード令嬢よりもうら若



き、花の顔に微笑を合む光景は恰も松柏に纏へる朝顔の如しとも謂は  
ん乎、サア、アーノードが教育を托されたらとて、余を介したる客歳の黒  
川玉子は通常女學生の如く見えたりき、而も結婚後初対面なるアーノ  
ード勳爵夫人は、争ふ可らざる高尚の品位を備ふされど余をして直裁  
に評せしめん乎、異國に移し植ゑられし一株の名花は、甘露を帯びし海  
棠の婀娜たるに似ず、秋陽の光りを受けし朝顔の、弱々として松柏に倚  
れるに似たらん歟。

談緒日常の話柄を逸し、余が目的の政談に入るや、アーノード即ち曰く  
『余は日英同盟論者なり、サリスパリー卿は愚なり、余をして總理たらし  
めん乎、余は直ちに日英同盟を訂するに猶豫せず、證左は即ち茲に在り』  
と勳爵夫人の黒川玉子を指しつ『我輩は既に日英同盟の魁を爲せり』と  
て、主客共に呵々大笑す、茲に於てかアーノードは勳爵夫人と目を擧げ、  
余を晚餐に饗して、一夕を相互の政談に割愛す可きを約したり、客の心

は恍惚として、望む所は政談のみ、而も主人は悠々として、晚餐主たり、政  
談副たるものゝ如し。

(其 二)

主客五人食卓を圍んで坐す、主婦席に在つて、肉を割き各自に配布する  
もの、黒川玉子のアーノード勳爵夫人なり、カアヴィンク並に卓上談話  
の操縦は西洋婦人に遜色なし、主婦席の右なる上席に就けるは中央記  
者にて、左は即ちサア、アーノード、中央記者の隣りに婦人客あり、看護婦  
亦卓を同うして、主婦席の向ひに坐す、晚餐献立の順次を亂さず、卓上の  
談話津々として進む。

晚餐終つて一同客間に退くや、主客の婦人多數を占め、口を政談に開く  
は最も社交の禁物なるも、余が目的は此禁物を提出するに在るものな  
れば、アーノードの客間に坐を占むるや、忽ち質問の一矢を放ち、一答一



問男子は世界の政談を論じ、婦人は社會の談柄を説く、例に依つて余が各種の質問持論を削り、サー、アーノルドが談論回答のみを抄録せん。

露西亞皇帝の世界軍備縮少論？夫は全く貴説の如く、英人蘇人が露國の支那問題に對する専横を怒り、斷然宣戰の決心を示したるが爲め、此英國に於ける排露の惡感情を融和せんとの意味もあらん、西比利亞鐵道の未だ竣成せざる今日、露西亞内地不作に苦しめる今日、巧みに露英開戰の危機を轉じ、以て世界を平和の美聲に眩惑せしめんと、の策畧もあらん、されど親しく露帝に謁し、能くムラビフ伯に會せる余は、露帝の宸襟實に世界の戰亂を憂ひ、熱心治平を希望するものなるを知る、故に世界軍備縮少の宣言は、ムラビフ伯の隠謀に出でたりと云ふよりは、寧ろ露帝が赤賊に成りたりと察するが適切ならん歟。

孰れかの帝王の口を藉つて、一度天下に顯はれんとせし、世界軍備の縮少論は、遂に最も隠謀に巧みなる露國、其隠謀中に獨り誠實なる露西亞

皇帝の口を依つて天下に公布せられたり、是に對する世界の論議は、各種各様なりと雖ども、列國軍備縮少會議は開かれ、散會の後互ひに軍備の擴張を講ずる、猶今日の如くなる可きは、異口同音是を唱道するに一致せるが如し、此時に當つて英米同盟には、殖民大臣チニソバーン氏の云へるが如く、英國より半途以上を進み、日英同盟には國會議員ベレスフォード卿の主唱せるが如く、英國の感情大に勃興し來り、從來孤立主義を遵奉したる英國も、今や將に孤立を棄て、我より進んで海外に同盟を求めんとする氣運に達せる時、端なくも露帝が列國に發布せる軍備縮少會議と清國駐劄公使バザロフ並に李鴻章等の貶遷は、先づ英國の同盟論者に、一小頓挫を與へたるものゝ如し、されど露國の侵略主義と東洋今後の形勢は、相互の利害休戚を均うせる日英兩國を駈つて、必然同盟を訂結せしむるの機會ある可し。

英國の公議輿論とて決して一定不變のものにあらぬと、さりとて浮萍



の水流に依つて、東西に漂流するが如きものにもあらじ、是れ多年列國和戰の經驗と研究を基礎として、是か土臺に英國の公議輿論を築き上げられたればなり、顧みて英國の公議輿論なるもの如何、加藤公使は貴下に向つて日本に公議輿論なしとて嘆息せりとや、さもある可し、從來外交に何等の經驗研究なき貴國にして、加ふるに代々の政府は「外交是れ秘密なり」との一言を以て、己が代々の失敗を蔽ひ、民を愚にして知らしめず、日本人民は外交と聽て秘密と悟る状態にして、如何でか經驗研究の上に乗固なる公議輿論を打ち建つるを得んや。

英國の輿論は常に準備せり、只機會の熟否如何に依つて、是が向背を決するのみ、故に支那問題に對する露國の處置如何に依つて、英國は直ちに日英同盟をも訂す可し、されど貴國の公議輿論は果して如何、經驗なく研究なく準備なく、唯外交を秘密と心得、事目前に起りし後、足許より鳥の起つ如くに騒ぐ、是れ豈國家の外交に處する途ならんや、日英同盟

の好機は、今後漸次に迫る可し、唯好機あり、英國是に應ずるのみにて、日本は元の空爾彌たる可し、日本の公議輿論にして、經驗研究の基礎上に建ち、常に自國利益の爲に絶えず應急の準備を爲さる以上は、今後の好機も日本屢々是を逸し、果は露をして南下侵畧の羽翼を張らしめんのみ。

されば日英同盟に對する目下の急務は、クレテ紛擾再び興り、露國パゾロフを免じ、世界軍備縮少を唱へて、支那に對する鐵手を緩めし此瞬間に、經驗研究の基礎上に、鞏固一定の公議輿論を築き上げ、以て他の必然の好機に投合す可き計を、今より準備するに在り。

獨り宮廷の雲上のみならず、サリスバリー侯、チェンバアレーン氏と雖ども、日本と日本人民を知らず、夫は日清戰爭前我英國知名の士にして、今日必然の結果を反對に豫想せしにても明瞭なり、されど日清戰爭一度爆裂以來、大英の上流社會は東洋問題に處して、英國の利益を保護せ



ん爲には、日本に頼らざる可らざるを覺り、大英の中流社會は、ベレスフ  
 オード卿の云へるが如く、敢爲決斷冒險の氣象を愛し、深く日本近時の  
 發達進歩を欽慕せり、是を英國に於る日英同盟論の基礎と爲す、  
 日英兩國相互の利益、彼我共通敢爲の氣象、此二箇は兩國民を驅つて、將  
 に未來の日英同盟を訂結せしめんとす、黃色人種非基督教民等の反對  
 論は、以て有力の議論と爲すに足らず、日英同盟の大障害は、今猶英國の  
 容易に同盟を訂結せざる孤立の癖と、世界各地に領地あつて、何時同盟  
 を繼續する能はざる事情を生ずるやも計られざるの點に在り、英國が  
 世界各地に領土を有し、利害の變轉定めなければこそ、英國は素と容易  
 に同盟を訂して、是が羈絆に繋がるゝを欲せざる所以なれ、英國と同盟  
 を訂せんとする國民の最も注意を要する所なる可し、  
 余が日本の爲に最も遺憾とする所は、日本が常に外交上に一定の本領  
 なく、千歳一遇の好機を逸失せしむるにあり、數年前トランスバールの

事件起つて、獨逸皇帝祝電を大統領リッセルに贈るや、英國是が爲に  
 殆んど戰意を決したり、余時に海軍大臣ゴッセン、殖民大臣チエンパー  
 レン等を見て曰く、「英國今や屈竟の戰艦を要す、日本政府が我國に製造  
 中なる富士八島の二戰艦は、英政府若し、是を希望せば、日本政府の好  
 意恐らく是を我政府に讓與せん、貴下等是を日本政府に照會しては如  
 何」と、英政府直ちに意を決し、加藤公使に依つて日本政府に照會せり、訓  
 令の返電來る、曰く「英國の好誼は深く是を謝す、而も富士八島は到底英  
 政府に讓與するを得ず」と、余は加藤公使と共に此訓電を見て、好機の再  
 ひ得易からざるに嘆息したりき、戰艦讓與の談判は、西米血戰前日本是  
 を米政府よりも受けしと聽く、是が利害得失は容易に斷定するを得じ、  
 されど東洋問題は、到底日英同盟を以て是を解釋せざる可らずとの方  
 針ならば、今後好機に際會せし時、此千歳の一遇を逸失せしむ可らず、英  
 國と英國民は、決して仇を以て恩に酬ゆるものに非ず、是等相互利益上



の好意こそ常に提携同盟の階梯たるものなれ。貴國が英國に富士八島を讓與せざりしを以て、貴國の利益貴國の見識と云ふ勿れ、さらば何故に當時の富士八島二艦よりも、貴國將來の大利害大見識に關係ある、フヒリツバイン群島をさへ、米國の占領に委してまでも、遲延ながら日英米同盟の方向に向つて進み來らんとするの愚擧を學ぶや。

ニカラグワ運河の開鑿、西比利亞鐵道の峻成、濠洲の進歩發達、支那全國の交通開放、一として世界政治商業の中心が、太平洋上に移轉すべき證左ならざるはなし、數十年後に現出すべき、太平洋上商業繁盛の光景を胸中に描け、美麗！崇高！記するに筆なく語るに辭なし。

噫上に皇統連綿萬世一系の英主を戴き、國を太平洋の中間に置ける、東邦優美の君子國！皇統連綿と萬世一系は、金銀珠玉以て購ひ得可きものならば、佛國の富を擧つて佛民是を購ふに躊躇せず、未來商業中心の

太平洋上に占めし好地位、殖民領土を以て交換し得可きものならんには、世界に跨る英國の領土を盡くして、英民是を交換するに憚からず、世界列國の欽慕措かざる萬世一系と、太平洋上の商權海權政權を掌握す可き好地位を占めたる日本、此二者を以て世界に雄飛す、何の難き事かあらん。

曾て日本政治家の英國に漫遊するあり、濠洲洋上の一粟、ニユーヘブライ群島を獲んとて、首相サリスバリー侯の鼻息を窺ふ、何ぞ其規模の微にして、其屬望の小なるや、地理歴史の點示に依つて、天の日本に授けんとて示現せる大任を想へ、フヒリツバイン、ラドロロン、布哇、ソサエチーの各群島は、將に日本の鐵袖を望んで風靡せんのみ、而して日本外交家の輕舉躁動なる、曩には米布合併の抗議に敗れ、今復我れより進んで、フヒリツバインを米に許すの愚を爲さんとす噫！

伊藤侯は支那改革の方策として、銀行設立、陸海士官の養成、軍隊徵募の



組織等を列舉せりとか然り支那人は生れながらの銀行家なり支那の一端より他の一端に送金せんと欲せば猶英國に於けると均しく容易なる手續と深厚なる信用とを以て是を爲し得ん是れ銀行家たるに適せる支那人の特質に非ずや貴説に云ふ一箇人としての支那人は能く戦へるも軍隊としての支那軍は戦鬪に堪へざりきとされば藤侯の畫策せるが如く士官養成軍隊訓練は必ず將來に成効す可し唯是を行ふの是を云ふより難きのみ而して露の侵畧益食の如き能く支那の大銀行成り士官軍隊の訓練功を奏するを待つものにあらじ若し支那の計畫成らんとするを知らば露は益々其成らざるに先つて是が慾望を満足せしめんと務む可しとは云へ支那は大國なり歐洲列國は日清戦争前に支那を見て臥龍一度蹴起せば今にも世界最大の強國たらんと恐れしが如く口清戦後の支那を見て恰も累卵の泰山を壓するが如く今にも瓦解分割の騷擾を夢想するは共に非なり支那猶ほ尨大の領土と

三億五千萬の人民を有し列國支那侵畧にのみ熱中すとも相互の猜疑容易に是が分割を許さず况んや世界各地の紛擾問題は踵を接して湧起し來り列國專意支那問題のみに熱中する能はざるに於てをや然りと雖も支那に於ける英露の衝突は必然なり日露の衝突亦必然ならん日本若し能ふ可くんば英露の衝突を傍觀せよされど傍觀者は埃及問題に於けるが如く佛以の悔悟を免れず日本傍觀する能はずんば斷然日英同盟の外交方針を一定せよ貴問我英國は露の對清策に對し英國の金を投じて日本の兵を訓練せしめ所謂日本の雇兵を持つて露の侵畧を禦がんとの議論ありやと然り貴下亦是を知らん我英國は是を露兵に施し是を獨兵に施し以て奈翁の大軍を敗るを得たりされば日本の雇兵論もなきに非ず而して日本是を諾するの日は英國必ず喜び容れんされど是は今日左程進みし議論にもあらざる可し日本假令雇兵を肯せずとも日英同盟は成るの日あらん日英同盟にして果して



成らば治平には以て支那内地の商權を分割し、騷亂には日英聯合の艦隊一擧して露の東洋艦隊を粉砕す可く、日本の陸軍以て旅順と浦鹽斯德を占領せば英は海峽地中の艦隊を擧げて黒海及びバルチックに進撃し、クリミア並にシロンスクットを衝破せん、誰か英國の陸軍を用いて堪へずと嘲けるものぞ、女皇一度一指を擧ぐれば立ち所に數十萬の精銳を得可し。  
開戦二年露は國力盡きて講和を乞ふ可く、一蹶泥に塗れて萎靡又振はず、社會の革命或は續きて數十年間捲土の勢力沮喪す可し、此時に當つて日本は樺太を回復し、朝鮮を屬邦とし、支那若し分割を免る能はずとせば、滿洲及び北清一圓を占領すると同時に、望まば福州沿岸を得可く、英は揚子江を本據とし、南清一帶を獲取して、揚子江、印度の寶藏安穩ならん、ビーコンスフィールド卿は云へり、印度寶藏の鍵は倫敦に在り、支那寶藏の鍵は以て倫敦と東京に割取す、豈又快ならずや。

夜將に十一時ならんとして、街路車馬の轍蹄刻一刻に消え去ると共に、冒頭小心の談話は、歩一步放膽風生の議論に進み、主客の紳士意氣共に軒昂、サア、アノノードの銀鐸逆しまに立つと同時に、貴女の主客長談義の傍聽に欠伸を催はし、アノノード勳爵夫人が鈴を張れるが如き兩眼、漸次に細りて上膝下膝相會せんとす。  
サア、アノノード忽ち女群を顧み、話頭を轉じて曰く、『東邦危急の風雲は貴下を駈つて國會議場に馳駢せしむるの時期あらん、貴下幸に議場に山でなば、能くアノノード勳爵夫人黒川玉子の銅像を鑄て、是を上野公園に建つるの動議を提出せんや、如何に噫我夫婦は朝に夕に貴國に誠忠を抽んずるもの夫れ幾何ぞや』と、主客共に微笑せんと欲して未だ發せず、余言下に應じて曰く、『國家若し是を要せば、余或は國會議場に顯はるゝの時機もありなん、されど夫れ遠き未來に屬し、貴囑亦未だ俄に應じ難し、故に余は茲に貴囑を修正して云はん、余歸朝後に大英國漫遊



の一書を作さんと期す、貴下幸に與ふるに夫婦二葉の眞影を以てせば、余誓つて是を著書中に挿入せん、夫れ銅像は風雨是を曝らし、時日是を朽ちしむ可し、去れど余が椽筆に成る一卷の丹青は千歳萬劫不朽無盡のものたらん、アーノード勳爵夫人日本國民の銅像を得んよりも、寧ろ中央記者の秃筆に描寫せらるゝを以て、最大至高の名譽ならずとせんや、とて當意即妙直ちに二箇所望の寫具を獲るに成功せしは、速かに新聞記者なりけりと、主客の男女抱腹絶倒、長政談に死せる一座の興味は、最終の戲問答に依つて、蘇り、甲談乙話夜の更くるを知らず。

### ○大英國前任の海軍卿を訪ふ

『名士の惡筆』と云ふ事、日本に於けるが如く、英國にも眞理ならば大英改進黨内閣の前海軍卿、セイ、ボ、ソ、ツ、ス、ペン、サ、ア、伯の如きは、優に大英現時『惡筆名士』の筆頭たらん、賦各種雜誌の『記名抄』にて、伯の蟹行を珍と

し看たれど、親しく伯が手記の書翰を受くるに及んで、更に蛭這變幻の妙到底端、睨す可らざるに嘆稱せり。

珍は即ち珍、今後一世紀を閱せば、大英海軍卿の手翰とし藏するに足らんと雖も、現在數人の重譯を待つて、漸く文意の幾分を窺ふ、不便亦甚なからずとせんや、一週前の豫約は、蓋し伯の注意周到なるに出でしもの乎、週日の餘裕なくんば、余の不敏なる途に文意を解するに及はずして、或は伯の馨咳に接す可き、千歳の好機を逸失せるやも計り知る可らざればなり、伯が手翰の重譯に曰く

ソローケンハム北卿

九十八年十月二日

余は九月二十九日附費下の書翰に對して、貴下に謝し併せて、貴下が日本に關し倫敦に於ける余の演説を好めるを喜ぶ、余は國會開期倫敦に歸居するの以前、時々業務の爲め一兩日を倫敦に費やすも、恐らく寸暇を得る能はざらん。



然らすんば余は喜んで面謁の約定を興えしならん、貴下若し僥倖を採るを好まば、十月十一日火曜日聖セームス、フレース二十八番に余を見出し得ん、されど余は其所に余の現在す可きを保證する能はず。

貴下の忠實なる

スベンサア

抑も大英に於けるスベンサア家は千七百六十一年男爵に叙せられ、同六十五年伯爵に榮進し、初代伯はノーザンプトンシヤアの太守たり、三代伯は大藏卿たり、四代伯は宮内卿たり、現時の伯は第五代のスベンサア伯爵にして千八百三十五年に生れ、愛蘭太守、海軍卿等たり、ノーザンプトンシヤア一圓二萬七千二百エーカーの地は、伯が繼襲の領土にして、ノーザンプトン市に本館を構へ、フアークンハムの北岬に控邸あり、倫敦の邸宅は伯の手翰にも記せるが如く、國會開期若しくは業務出京の當時、伯夫婦の茲に止宿するものと知らる、大英有福の貴族特に前任の海軍卿を以てして、伯は猶業務即ちビヤテスの繁忙なるを誇る、以

て英國貴族一般の氣質如何を想見す可し。

十月十一日火曜日午後二時を期し、聖セームスフレース二十八番を訪ふ、聖セームス街は、英皇在位六十年祭當時の鹵薄道にも當れる如く、廣闊有名の大街なるも、聖ヒームスフレースは、是が右側の小路にして、街幅狹隘、建築亦宏壯ならず、漸くにして二十八番を搜出し、訪問の鈴索を引けば、燕尾服の家扶出で来る、伯に刺を通じて内に進めば、玄關の右に古机一脚、左に椅子二臺、机上には絹帽を倒まに伏せ、椅子には外套の疊みしを被せ、側の洋杖立には、洋傘、洋杖列を亂して、暴風の後の麥畑に勇拵たり、燕尾の家扶靴先を欲て、歩調靜かに、卿に言上致す間、暫時お控へあらせられ、いと言動共に、恭々しけれど、端近の椅子に外套を脱がせて、『いざ先づ是れへ』と少々驚き入つたり、されど此日の吃驚は、是ぞ微少の冒頭なりと後に至つて知られける。家扶の案内に連れて、階上の客室に入る、室は狹隘なるも、壁間に懸る繪



畫、マントスピース安置の裝飾品、床上の敷物、配置の椅子、一として普通一様の客室に非ざるを證明せざるはなし。

待つ暫時、突几として顯はれ出でしは、身幹高く四肢瘠せたる、六十餘歳、鑢鑢の一老翁、身に縞のモーニングコートを着し、領下のみに白髯を貯ふるもの、數時、是を我貴族院内に求めなば、禿頭ならざる渡邊驥男の面影に故山川浩將軍の肉付ける肢體を折衷せるもの、即ち此老翁の眞影ならん乎、是れ主人のスペインサア伯爵なり。

握手寒暄の挨拶終り、主客の着席定まつて、伯は徐ろに口を開く。

「余はスペインサア伯爵夫人と共に、三年前貴國に漫遊して、鄭重なる歡迎を受けたりしが、日本に於て先づ旅客を驚かすものは何ぞ、内海の美景は英國に於ても、歐洲列國に於ても甚だ稀れなる佳景に非ずや、マウンテン、フヤマの崇高なる、日光神廟の壯嚴なる、能く何物か、繪畫に優る此美景と、趣味津々たる此高等美術に匹敵し得る。」

日本人のエナアシー、若しくはアポリチイに對しては深く日本を研究すればする程、且つ吃驚し、且つ賞賛するの外はなく、余が親しく歴覽せる各造船所、東京大學等、是を證して餘りあり、特に其海軍と陸軍とは、新たに戦勝の餘威を受けて、將に來らんとする極東問題の解釋には必ず樞要の地位に立つ可き事、我英國に在つて、今は誰一人疑ふものはあらず、されど陸海兩軍の擴張に對し、貴國目下の財政は如何、地租増加は議會の反對を受けて果さず、外資輸入は未だ方針決定せずして、上下の苦惱一に財政に集注せりとか、左もある可し、左もある可し。

併し貴國は、極東問題未來の解釋に對し、樞要一の地位に立てるは、是れ天の命ずる所、万人の認むる所也、今や貴國は各方面に膨脹し、人口の膨脹よりして、移住民地の膨脹を求め、各種工業の膨脹よりして、商業市場の膨脹を求め、商業市場の膨脹に關しては、貴國確かに我英國と競争の地位に立たん、而も余は是を友誼の競争と見て、貴國も漸次自由貿易の



方針を執り、商業上にも外人の誹謗暗すしき不信用を快復し、徳義正直を重んぜば、英國近時他に同盟を求むるの風絶へたりと雖も、英民舉つて貫國と同方面に立つを希望せざるものなかる可し。恰も倫敦日本協會年會の晩餐席上に於ける、伯が短演の復習を聴くが如し、抑も富嶽の崇高なる、日光廟の莊嚴なる、我れ伯よりも能く是を知る、日本萬世一系の英主を戴き、日本太平洋上樞要の地に位置せる、我れサア、エドゥヰン、ブーノードよりも深く是を信ず、止めよ伯止めよ伯、我が切に聴かんと欲する所は、伯が日英同盟に對する目下の真情如何に在り、我が切に知らんと望む所は、大英上流人士が日英同盟に對する刻下の態度如何に在り、余は大英改進黨一流の今猶英露調和に戀々たるを見、余の友人より伯が日英同盟否、日英提携にさへ冷淡水の如くなるを聴く、いざ問はん、伯が親しく其口より、同盟の二字を洩らせし時を好機に、いざ承はらん。

『貴卿が清國弊政改革、露國南下侵略の防禦、最後に日英同盟に對する持論如何、請ふ願くは預り聴くの榮を得ん』  
余が質問は短刀直入、伯が同盟の言辭を洩らすと同時に余が唇より迸出せり、伯が上下の唇は忽然堅く結びたり、伯の肢體は安樂椅子に倒れかゝつて、伯の頭後に反つて昂然たり、伯の兩眼刮と見開らき、伯の白鬚少しく慄ひぬ。  
『ナニ、清國弊政の改革とナ、夫は机上容易の談に非ず、頃日新紙毎朝の報道を見ずや、露國南下侵略の防禦とナ、露國は既に旅順大連を占領し、其實滿州一圓を併呑せるに非ずや、何をか露國南下侵略の防禦と云はん、日英同盟！ 日英同盟！ 我英國民は上下擧つて、日英友誼深厚の國交際をこそ望め、日英同盟！ 日英同盟！ 未だ俄に語り難し』  
恰も忠臣藏七段目、由良之助女房と石が其地位を顛倒して、提灯に釣鐘釣り合はぬは不縁の元』とさつぱりタンカを切りしが、如し、噫、大英上流



名士の、未だ全く醒めざるもの斯の如き乎、余が當時の失望吃驚豈啻に本藏娘小なみの比にあらんや、さは云へ東洋今後の形勢は、英より進んで日本に同盟を促がすの時機ある可し。...

○大英極端の同盟論者を訪ふ

(其一)

絶對孤立を主義とせる英國に在つて、絶對極端の同盟論を主唱するもの是をスベンサア、ウヰルキンソン氏と爲す、氏の著書多し、『陸軍頭腦』、『海軍頭腦』、『海上權』、『國防論』、『義勇軍隊』、『グレイト、アルタテチー、ア』...



十年獨力以て、大英國民の酣睡を警醒せんと抱負す、復以て大英論客中の一名士たるを失はず。

氏が最近の著書クレイト、アルタチチー、並にチーシヨンス、アウユニクニングは共に歐洲列國の政治を論議せるもの、チーシヨンス、アウユニクニングは、二年前モーニング、ポスト紙上の論説を補綴せしものと聽く、書中氏が持論なる極端の大英同盟論を主唱し、露佛の同盟を割いて、露の侵略主義を防止せん爲め、左記四條の同盟條約を建策せり。

(一)英清日の三國間に同盟を訂し、露國若し支那朝鮮の蠶食を企てなば、三國聯合是を防止す可き事、但し日清兩國は前記同盟を希望す可しと信憑し得るの徵證あり、英國東洋艦隊は新らたに在歐艦隊より送援せざるも、猶日清兩國を輔けて、露國東亞細亞に送致し得るの軍隊を撃破するには、充分なる可し。

(二)英國の兩國間に同盟を訂する事、此同盟を訂結せんには、先づ兩國

間に横はる殖民地的利益の衝突を一掃せざる可らず、故に英獨共に致命の利益と信ずる地域を協定し、兩國相互に是を承認し、露佛兩國をして、開戦の外是が侵略を許さしめざる可し、此利益たる英に在つては、埃及の位地、黒海に於ける列國貿易の自由、海峽の自由、並に海峽沿岸露の占領を許さざる事、中央亞細亞並に亞富汗及露の既定境界は、是が變換を許さざる事、獨は英の此利益を承認し、更に獨の利益を提出指摘して、英の承認と相交換す可し、而して英獨の各一國若し露佛の各一國と交戦せば、他の一國は局外中立を嚴守す可く、露佛若し他の一國に應援せば、英獨亦相聯合して、是を撃破す可き事。

(三)英埃の兩國間に同盟を訂し、黒海並に海峽に於ける露の侵略主義を防禦す可き事。  
(四)英伊兩國間に同盟を訂し、地中海上の均勢を維持す可き事、伊は是を英埃伊の同盟に加ふるを得可く、英の財力以て、伊の陸海軍に補給



するも妨げなし。

氏は以上の極端同盟を主唱し、此建策にして實行せらるれば、露は極東並に黒海に活動する能はず、轄じて印度の北境に迫るも、印度の守備は嚴を加えて、侵し難く、佛の干渉は、獨の反抗に制せられん、斯くして歐羅巴並に亞細亞の平和は維持し得らるゝ而已ならず、露佛の同盟茲に破れて、露復爲すなきに終らんと唱導せり、實に在野理想の極端同盟論にして、是を在朝實際の斷行政治家に望む可らざるも、氏が此極端論を主唱して以來、茲に二年、今や日清英同盟は漸やく頭角を顯はし來り、英獨兩國は相互殖民地利益のアンダスタンヂングを交換し、獨は英の埃及利益を承認し、英は獨の小亞細亞利益を承認し、獨帝茲に小亞細亞漫遊を企つるに至る、氏が政見の明確なるを證せずんば、あらず、中央記者一輛の馬車を駈つて、氏をオークレイ街の閑居に訪ふもの、日本國民をして、此大英極端の同盟主唱論者が、日本に對し、日英同盟に對し、現時如

何なる政見を抱くかを、知得せしめんが爲め也。

(其二)

スベンサア、ウヰルキンソン氏は、今や老ひ且つ瘦せたるも、長大の軀幹六尺に餘り、成島柳北の長顔に、西郷侯爵の鬚、稍や長きを加え、廣額隆準、一雙の巨眼、是を見張れば、炬の如きも、平常正午の猫眼に似て、稍ともすれば、睡らんとするに似たり、行動莊重にして、對談沈痛、一言一句先づ熟考して、而して諄々是を靜かに發す、氏が令嬢五つと三つ許りなる、時に繪畫など持ち來りて、是れを氏に示す、あらば、一々鄭重に手に執り上げ、是は甚だ美麗なりと賞賛し、復令嬢等の一々中央記者に是を示して、室を出づる等、氏は政治論客と云はんよりも、寧ろ政治學者に近く、時々異邦人に接見して、是が政見を談論するに馴れたり、と見ゆ、書齋廣からず、四周堆積の書籍多からず、茶縹の脊、廣新らたならず、小指の金輪光輝



を失ひ、シャイツ、カラア甚だ白からずと雖も、氏が顔貌と言行は宛たる一箇の學者あり、握手寒暄の辭終り、主客席を定めて、共にシガアを一吹するや、氏は恰も不俱戴天の譬敵、茲で逢ふたが百年目と云はぬ許りに口を開く。

『日本の進歩は躁急なり、日本社會の變遷は急劇なり、日本爲政治家の所爲は狂奔なり、余は日本を知らず、而も日本は泰西眼より是を見て、三鞭酒の二日酔を疾めるが如し、余は日本國民に向つて誠意を推して忠告す、静かなれ穩かなれ狂奔する勿れ、冷やかなれ淡やかなれ熱騰する勿れ』

現世紀の當初、泰西社會の變動に依つて湧起勃興せる列國の慘狀を看ず、汽力電力の發明あつて、職業組織の革命以來、資本労働の鬭争絶えず、社會共産の黨派何に依つて起り來れるかを思へ、昔は労働者少時より工場に入り、徒弟より進んで職工、職工より進んでパートナア、パー

トナアより遂には、其工場の場合たるに至るを得しが、職業組織の革命に依り、數千の職工一工場に群役するや、資本主は父祖傳來の資本主職工は子孫末代の職工と爲り、茲に割然たる資本家労働等の二階級を産み出し、資本労働の戦争起つて、労働者不平の聲絶えず、况んや是が革命當時、數十年來、鍛へ上げたる鍛練の老手工が職を喪ひ、路頭に迷ふて、黄口乳臭の小童が、器械工場に莫大の賃錢を得るの變象ありしに於ておや、社會黨共産黨の起り來れる、山來なきにあらざる可し、日本は今や職業組織を改革し、而して泰西列國に後れざらんとは是れ務む、其志や好し、知らず日本の爲政治家は、是が原因結果を知悉し、一利を起せば、必ず是に伴ひ來る一害を救濟するの成竹ありや、官に職業組織の末而已ならず、立國の基礎大本たる可き、日本國民の教育は如何、宗教は如何、徳義は如何、不正の觀念は如何、政治を云々し、外交を云々し、陸海軍の訓練には外人を聘し、商工業の視察員は是を泰西列國に派す、而も泰西立國の大



本基礎は、那邊に在つて如何なる變遷改革を経由せしかを調査研究し得たる政治家ある乎、宗教家ある乎、教育家ある乎、學者ある乎。農業組織、工業組織、商業組織、教育組織、財政組織等、是れ皆日本の既に解釋し盡くせし問題なる乎、假りに解釋し盡くせりとするも、是が整頓は數十年を経由して、猶完成を期す可らず、試に過去三十年來日本の爲せる行動を看よ、始め鎖國攘夷を唱へ、遂に開國進取に決し、米人を聘し、英人を聘し、佛人を聘し、獨人を聘し、一時に多數餘りあるの外人を聘し、今や忽然悉皆を止め、一意専心日本人の手に何事をも爲さんとす、其銳氣や愛す可し、其愚擧や及ぶ可らず、虚心平氣にして是を思へ、三年五年の洋行者が、能く泰西の真髓を穿ち得るものに非ず、是れ日本眼を以て泰西を視ればなり、されば聘用の外人、所謂泰西眼を以て日本を視る者と日本眼を以て泰西を視たる洋行者と、兩者反對の考慮意見を折衷してこそ、茲に始めて其真髓の幾分を得るならん、年少氣鋭、躁急熱騰、直ちに以て日本眼の泰西視察者を、何事にも泰西の真髓を得て、泰西聘用の外人に優れりと爲し、直ちに是を以て彼に代ふ、愚に非んば狂ならざるを得んや。

深く日本の爲に計るに、既に開國進取の方計を執り、近々内地開放、外人雜居を許す以上は、最も人種の僻見を注意豫防せざる可らず、我英人は、猶佛人を好まず、獨佛人亦我英人を好まずと雖も、云は、同種の犬屬に大同小異の差別あるが如く、互ひに彼我の人種、宗教、教育、言語、習慣、衣食住、禮儀作法、正不正の觀念を知る、されど白色人種と黄色人種に至つては、恰も犬猿の相異なるが如く、互ひに彼我の大隔絶を見て、而して其隔絶の依つて來る所を知らず、例せば、貴下と余と、今一室にあるが如く、余は異邦人を多く見、多く知り、敢て人種の僻見なく、貴下亦幼より外人に接して是が僻見少なからん、而も共に同一室に在つて、人種相異の觀念を胸中に浮べざる歟、是れ天性の然らしむる所、能く人意の制し得る所



に非ず、且つや貴下西遊の感想は如何、始めは視聽盡く、樂しく、暫らくして、倦怠の念生ずるや、見聞共に樂しからず、常に水中の油の如く、快々として、懷郷の念勃興せん、泰西に在る日本人、猶り然る而已ならず、是れより日本に雜居せんとする泰西人亦皆然るなり、此時に當つて日本國內に到る所に、内外人の葛藤紛議を生ぜん乎、各泰西本國の人民は、元より劇務寸暇なく、優々日本の真情如何を研究するの餘裕あらず、唯新聞雜誌の電報記事を試金石として、以て極東異邦の國民を裁斷する而已、斯く泰西本國の人民が、東邦國民を裁判するに重きを措ける、新聞雜誌の記事論說なるもの如何、彼等とても、歐洲列國湧起の交渉に全力を傾け、眼を東邦國民に注ぐの餘裕なく、杜撰裝味の電報を齎らして、本社に致せば、直ちに翌朝の各紙上に掲載せられて、本國民の感情輿論既に定まり、再び掃拭するの機ある可らず、愚昧僻見の輿論一度泰西列國の政府を動かせば、憐れ東洋の英國も、世界に度外視せらるゝに至り、容易に回復

する能はざるの悲境に沈淪せん、年少氣銳の青年は、目下の日本を千歳の一遇と云はん、遠大老熟の眼より見れば、現時の日本是れ千歳の危機、盛衰興亡隆替安危の一大岐路に頻せる也。  
切に日本の爲に計るに、泰西列國をして、廣く日本現在の眞價を知らしむるに務め、假令杜撰の報道新紙に上るも、全國民をして是を判別するの素を得せしめざる可らず、而かせん爲には、泰西列國撰擇知名の士を招じ、是を日本の國寶として、現時進歩の日本を示せ、一には彼等泰西眼より日本を視たる評論を得て、是を内政の改良に取捨折衷す可く、二には彼等本國に歸つて後、日本の眞價を泰西列國に紹介せしめて、世界の外交場裏に雄飛し得るの素を作れ、是を日本開放内地雜居實行前の一良策と爲す。  
日清戰役以後の日本は、外交を一にして、内政を二にし、軍備を先にして、職業を後にするの感あり、是れ慥に誤謬なり、外交なるもの豈一朝一夕



の談ならんや強て外交の刷新を求めば先づ有爲拔群の壯士數十を拔擢し是を泰西列國に派して古來外交の關係沿革を研究せしめよ而して後に炯眼現時の外交を看守せば始めて共に外交を談ずるに足らん是れとても容易の業にあらざる可し故に余は茲に日本の爲に建築して云はん。

一に泰西列國より知名の國賓を招じ廣く日本の眞價を列國に紹介せしめ二に有爲拔群の壯年を列國に派遣して泰西列國の外交蘊奥を研究せしめ國本は内政を専らとして農業水産工業殖産經濟商業教育宗教治水築港運輸交通美術鑛業林政牧畜等の組織を研究し一には泰西眼の日本説と二には日本眼の泰西説とを取捨折衷し其眞髓に近きものを執つて醇々漸次に改良を加へ國是は是を海國と定めて國防は海軍を第一とし陸軍を第二とす可く海軍の擴張も乗員の養成を先とし艦船の造築を後とす可し。

夫れ艦船の造築は二年ならずして得可く十年にして舊式たるを免れざらん而も費額は莫大なり是に反して乗員の養成は下卒五年士官十年猶難く滿期後長く豫備たるを得て是が費額も莫大ならず以上の建策を總括し一言以て余が日本の門途を議するもの左の如し。

今後二十年を期し日本の執る可き大方針は内治漸次の改良を主として國本の培養に務む可く外交を客として切に列國との交渉を遠ざけ國防は海軍を主とするも財政に伴はざるの擴張を避け日本を知り泰西を知り世界を知り日本始めて世界の列強に算入せられて後世界外交の潮流を計り日本の東洋政策を斷行す可し

醇々詭々數千言更にシガアを一吹し安樂椅子に倚つて兩眼を閉づ稍や暫らくにして口を開き是は前提なり是は前提なり思ふに貴下必らず來訪の諮問ある可し請ふ希はくば與り聽くを得ん」  
江河の積水を決するが如くに問ふて曰く我邦今後二十月間管勝臥薪



内治の國利民福を増進するを以て急務と爲し、外交の交渉葛藤を避くるを以て專一と爲すは、貴説既に是を聽く、されど極東の風雲は國際の外壓迫つて内治の改良を紊し、軍備の増配胃して國本の静培を妨ぐ可し、是に處するの貴説如何、日本の孤立二十年、露獨は如何に北清を經營す可き乎、英佛如何に南清を分割す可き乎、露の侵畧を防禦するの良策如何、日英同盟の貴見如何と疑問口を衝て雨覆の如くに降れば、ウヰルキンソン氏は悠然シガアを燻らして兩眼を閉つるもの稍や久し、既にして兩眼を刮と見開くや、諄々詭々として再び持説を開陳せり。

『抑も戰鬪なるものは、自己の政策を斷行せんが爲の手段に外ならず、日清戰役の目的政策は如何、朝鮮支那に日本の國利國權を扶植せんどの政策に非ずや、結果如何、日本にして廣く泰西列國の關係意嚮を察し、深く戰役前後の大計を豫知したらんには、數倍の好果を得たりしならん、されど是は到底日本に望む可きに非ず、泰西列國すら日清戰役以上の

好果を獲るもの甚だ稀れなり、况んや是れ既に過去に屬し、順逆の潮流早やくも去れり、世界外交の動靜は、猶訓逆の潮流に乗り出す艦船の如し、逆潮に抵抗せば、勞して功なく、破船の大厄に逢ふて、世界の誹謗を蒙り、順潮に際會せば、勞なくして功を收め、天下の羨望する所となつて、至高の榮譽を一國に集む、故に鍛鍊の外交家は、常に國際潮流の順逆を察し、列國外交の關係沿革を羅針盤とし、是が方嚮遠近を測定し、順潮なれば進み、逆潮なれば退く、政海の潮流亦甚だ海洋の潮流に似たり、順逆上下風雲に依つて來往起伏す、故に鍛鍊の外交家は、常に逆潮に胃進せざる而已ならず、靜退以て、今回の潮流に乗ず可きの準備を爲す、世界外交の潮流は何處を中心として、相來往起伏するや、云ふ迄もなく、歐洲の政海即ち是れ也。

遠く古昔の舊史に逆るを須るず、近く例を最近列國の活動に求むるも、千八百七十年前後は、露獨澳の相提携せるあり、降つて獨澳伊の三國同



盟を形成し、露佛の同盟茲に成れり。是等歐洲政海の潮流變換は、是が變換發表の日に變換するに非ず、必ず依つて來る所あり、一年一月一日として、歐洲政海活動の波瀾起伏來往せざるはなし。是れ鍛鍊外交家の執つて以て、進退に資する徵候なり。

以上の徵候に依つて、聊か余輩の私見を加へば、目下フワシヨイダ問題に關し、英佛の開戦せざるは、是れ日本の不幸なり、歐洲の禍亂湧起するあらば、日本は靜かに東邦の經營を得可きならんに、英露戦へば、佛大に露を輔けんも、英佛開戦せば、露國佛を扱くるに進まざるが故に、フワシヨイダ問題は、英佛の開戦なくして、事止まん、歐洲の風雲靜穩ならば、露は當分極東既獲の經營に繁忙なる可し、而も今後二十年間には、更に大に滿蒙の野に動く可し、日本は是を欲せざる可し、されど獨力能く此大勢を支へ得る乎、

歐洲列國の政界如何にと顧みるに、清國に於ける露の南下經營を欲せ

ざるもの、一に英なり、二に獨なり、英は揚子江沿岸に據り、獨は山東半島に據つて、早晚露の南下と相衝突せん、されど英國は未だ獨力以て是を支ふるを欲せず、獨國亦獨力を支へ得ざらん、是に於てか我大英の極東に於ける露國南侵問題には、日英同盟の説是に伴ひ、余の如きは二年前に、日清英の三國同盟を建策したれど、我英政府是を用ゐず、今後亦是を用ゆるの徵候見え、先にしては日清戦後に、日英を連合して、以て侵露に抵抗するの順潮を失し、後にしては日清英を合縱して、旅順大連の露國併吞を撃退するの好機を喪ふ、噫、今や日英同盟の二順潮は去れり。

日英同盟論の中間に横たはり、是が障害たる可きもの、今は人種の異同に非ず、兩國相互の無知に非ず、利害權衡の釣合に非ず、實に首相サリスパリ卿に在り、サ侯にして首班に在らん限りは、日英同盟の實行甚だ期し難し、英既に然らば、獨は如何、獨は露國の南侵を欲せざるも、獨國最



近有力の對清論者は、日獨の同盟を欲せずと云へるを讀む、日本たるもの今にして自己に復れ、普天率土頼む所は自己あり而已矣、上には献身國家に許す賢明の爲政家、下には和衷協同漸進確歩の日本國民、今假りに一步を譲つて、日英若しくは日英同盟の順潮に際會したりとせん乎、日本の政策は何ぞ、日本の利益は何ぞ、日本の支那に求むる所の領土は何處ぞ、不幸フヒリツパイン群島は今や米國の領土に歸して再び日本の親視を許さざらん、日本にして遼東海岸に根據を求めば、露と英との衝突豫防器たるに過ぎずして、日本實際の國利國權何處に在らん、山東半島と楊子江の中間に占據せば、獨と英との中間に挿まる可く、楊子江以南は英佛に介して、佛國是を寛容せざらん、支那分割の大勢既に畧ぼ成つて、是が分割の實行は容易に期す可きに非ざるも、日本のはに施設したる所果た施設し得可かりし所何處にあるや、朝鮮並に臺灣沿岸の獨立は、日本として能く爲し得可き施設ならん耳。

進んでは現時の列國深く日本に結んで露の南侵に當るものなく、退いては日本列國に結んで、其得る所常に兩強衝突の豫防器たるに過ぎざらん、進退茲に谷まされる日本！失望する勿れ、落膽する勿れ、躁急狂奔する勿れ、實力未だ整頓せずして、徒らに列強の動靜に抗爭するは、管に天下嘲笑の具たるに過ぎず、日本如何に奮興すとも、天下自然の大潮流を支へ得ざらん、靜かなれ、冷やかなれ、政海順逆の潮流は一起一伏一上下す二十年間國本を培養しつゝ、外交を避けて外交を看守しつゝ、靜かに冷やかに待つに如かず、英露衝突の怒濤高く、獨露衝突の暗潮急なり、日本に執つて勞少くして功多き、天下政海の順潮は、早晚必ず極東に湧起せん、此時に當り日本たるもの、驟起一番順風に帆を張つて立て！シカシ日本に順逆潮を見定めて能く誤らざるの船長ある乎、古往今來列國の歴史は、是が原因結果を羅針艦とし、百發百中其方針を誤らざるの運轉手ある乎、乞ふ少しく列國政海の順逆潮を驗するの法を説いて、以



て聊か参考に資せん。  
夫れ愛憎は簡人の私情なり、好悪は國民相互の感情なり、國と國政府と政府の公際には、愛憎なく復好悪なし、外人の英政府を誣ひて利己一轍、噠馬を煽動して噠馬を救はず、希臘を煽動して希臘を輔けずなど稱するものあり、何ぞ其言の淺薄にして愚蒙なる是れ英國人の私情英國國民の感情と英國政府の公際とを混同して、列國政府の離合皆自己の利益を基礎とするを陰蔽するもの言なり、故に是等外交の表裏消息を考究しつゝ、靜かに今後二十年の國本培養を積まば、能く二十年ならずして、日本政府屢々英獨佛露の好意に接せん、列國政府の好意なるもの即ち列國政府自己の利益の爲めに、日本政府に求むる所ある所以にして、日本は日本自己の利益の爲めに、好意の列國中、彼我が利益衝突少なく、和合多きものを撰び、是と商戰銃戰の野に相見ば、是ぞ實際問題に處せる、兩國間の利益同盟なり、思ふに日本此同盟を訂するの機會あらん、さ

れど條款を具へ、歲月を期し、攻守同盟條約を訂結せんが如きは、英國近況猶孤立に馴れ、サリスパリー侯亦終始此頭腦なし』

### ○大英未來の大統領を訪ふ

(其一)

奮然脚を揚げて英蘇の野に過激の改進黨を唱道するや、是が足跡常に淋漓の血痕を印し、國會議場に皇室費調査の提議を起すや、英米の新紙目して大英未來の大統領と爲せしもの、是れ彼のチャールズ、デルク氏に非ずや。  
盛名隆々前除多望の好チルク、不幸一度馳名を負ふて十年再び起つ能はず、而も『グレイタア、ブリテンの諸問題』『歐洲政論刻下の態度』『大英陸軍』『國防論』等を著けし、其『歐洲政論刻下の態度中』白耳義陸軍の獨立



維持するに堪へざるを痛論するや、爲に白耳義政府を撼動し、之が國防會議を組織せしめたるが如きは、實にチルク天與の才藻に依つて然る而已ならず、彼れ殆んど世界周遊を試むるもの二回半、歐洲列國に自己の秘書通信員を有し、以て列國の形勢に絶へざる注意を加ふるが爲めなり。

サア、チャールズ、ヂルクは、千八百六十二年に叙爵されたる、ウエントウオース家二代のバロネツチイにして、千八百四十三年に生れ、ケンブリッソの學位を得て、第一回の世界漫遊を企て、是が處女作、グレイター、ブリテンを公刊するや、歳甫めて二十有五、爾來嶄然頭角を顯はし、千八百七十二年三月、國會に皇室費調査の勳議を提出するや、之が前後は世界の耳目を一身に蟠め、日々各紙にヂルクの言行顯はれざるなく、上下の社會ヂルクの談論是が話柄たらざるなし。

千八百八十年より八十二年迄、改進黨内閣に外務次官たり、八十二年よ

り五年迄、縣治局總裁たり、故ク翁の麾下に參じて、今の殖民大臣、チエン、バアーレン氏と並稱せられ、チ氏通商局總裁たりしが如きは、ヂルク全年少の故を以て、チ氏に一步を讓與し、是が前途を開かしめしなりき。

サア、チャールズ、ヂルク再度の夫人は、レデイ、メリア、フランシス、ストロングと呼び、さる牧師の未亡人なるも、才色双美、特に美術の趣味鑑識を備へ、幾多の著書あり、世に行はる。

曾て屢々國會議場にヂルクの風采を望む、白髯禿頭の一翁、質問漸次の目錄を手にし、忽ち起立し、忽ち復席するのみ、質問目錄の一行記録をすら是を議場に高唱せず、而も彼が質問の要項と、是が政府の答辨は、常に列國の新紙に電報せらる、抑も何の故あつて乎、ヂルク獨り世界外交場裏に此特遇を享有するや。

往年ヂルク國會に陸軍を痛罵せるあり、軍人議員冷笑措かず、チルク即ち冷笑軍人を一睨して曰く、誤想する勿れ、軍人以外に軍事に通曉する



ものなしと、余は今足下と軍事通曉の技倆を角せん、敢て問ふ足下實戦の戦場と、余が實踐の戦場とは、其數果して就れが多き」と軍人議員顔色なし、是に於てか即ち知る、ヂルク國會の談論は虚聲に非ずして實勢に在り、彼が满腔蓄積の議論即ち溢れて國會議場に迸るものなるを、前任外務次官カーソンは云ふ「サア、チャールズ、ヂルクは、廣く深く何事をも網羅し知る、故に其談論時に錯綜前後して、傍人殆んど要領を得るに苦しむ」と或は然らん、されど目下の英人中能く天下の大勢に通ずるものを索めば、何人も一にヂルク、二にグレイを推す、抑も此大英屈指の名士果して如何なる經綸抱負をか有せる、中央記者氏を訪ふて其胸底を叩かん、と欲し、其會見の日を問ふ、氏手書を飛して曰く「十一月廿九日午後三時を以てスロオン街七十六番館に會見せん」と

記し終つて大英碩儒ハアバート、スパンサア氏よりの書翰を接手す、先生今や慢性患者として、ブライトンなるバアシヴァアル、テレス五番

館に静養中、幾多年來の親友も、醫師の禁制に依つて謝絶し居れば甚だ遺憾ながら中央記者に會談するを得ずとの報也、余輩は我日本國民と共に深く先生の一日も速に快癒せん事を祈る。

(其 一二)

スロイオン街の一角に玄關の構えを築き出して、少しく櫛比の連接憐家に異なるもの、是ぞ七十六番なる氏が控邸にして、剝析に應じ戸口を開くもの、燕尾服に身を回めしウエータアなり、看れば廊下の机先に先客の絹帽外套を並列せしもの、既に五六即ち刺を通じ案内に従ひ、壁間に稠掲せられし歴史畫を打ち見やりつゝ、階上に攀ちて客室に入り、四周の書架に眼を配つて主公の愛誦する所果して何れの著書にやあらんなど、打ち見やりつゝある際、階下忽然慌たしき靴音起つて、階上に馳せ上るものあると同時に、室外より大聲して「ハウ、ヅウ、ユウ、ツウ、サア」



と鄭重の挨拶を爲し、室内に入つていと熱心に握手の禮を行ふもの、當年正に五十有五歳、身幹肥大、身に縞地の脊廣を纏ふ、廣額隆準、一双眼炬の如く、頭稍や禿げて光り、顔薄く丹朱を塗れるが如くに輝やく、強ひて容貌風采の對偶を、我國會議員に索むとせば、今井磯一郎氏の禿頭を減じて、村田保氏の銀髯を増せしとも見ん歟、而して滿面、眼耳鼻口の總配置は、概して其規模大なり、是ぞ當館の主公、改進黨屈指の名士サア、

チャールス、ウエントウオース、デルクなる。席定まつて寒暄終る、余先づ口を開いて曰く、「貴下の著書能く日本に知られ、貴下の論說常に我日本新紙に照引せらる、貴我兩國親交に進むの今日、貴下能く吾新紙を介して、親しく日本國民に語るの意なき乎」と先づデルクの顔を見詰めて、是が胸裡の感情如何を測る、彼れもさるもの、當初よりニヤ／＼微笑を合んで、我顔を打ち成りたるが、茲に至つて打ち額づき、夫は餘りに漠然たり」と軽く答へて、余が談話の一步を進めん

事を促すものに似たり、余即ち軽く一步を進めて曰く、「東邦問題に關する、貴我兩國の態度交情、日に月に其歩調を進めんとする傾向あるに似たり、是に對する貴意如何」と彼れ猶口を嚙みて、媢如たり、事茲に到る最早、余が眞意を包むに由なし、即ち襟を正して曰く、「日英同盟に對する貴見如何、羈絆は何ぞ、障害は何ぞ、故シ、レイ教授の名著にも、同盟問題の障害として、人種、宗教、利益の三異同を列舉せり、今日英は漸次親交の方面に進むに似たれど、是が同盟の羈絆を問へば、唯漠然たる共通の利益ありと云へる而已、夫も仔細に點檢せば、相互に利害の衝突あらん、况んや人種、宗教を異にして、日英同盟遂に其聲のみに終らんとす、是に對する貴見果して如何なるや」と彼れ莞爾として頭を左右に振る、「人種、宗教の異同は、或は永久同盟の障害たらん、されど目下の東邦問題に際し、日英兩國共に北京に同方向の運動を執らば、實際の同盟行はれたるに庶幾からずや」と余輩不滿の念慮禁ずる能はず、ベレスフォード卿訪問



以來、倫敦支那新報の主筆並に毎日郵報の外報主筆等より、英國殆んど日本を眼中に措かざるの説を耳にし、特に清國改革事業に就ても、英は自己の獨占を得て、支那を第二の埃及とせん事を望み、日本の是に干渉して、快く其利を配分するを欲せざるを知る、噫、天下列國の大勢に通曉せるの彼れにして、猶八年前其著「グレイター、ブリテンの諸問題」中に特記せしが如く、「東邦問題は、英、露、清の三國に依つて解釋せらる、日本今や大に活動せんとするも、東邦問題の解釋には、到底喙しを挿むに足らず」との持論を今に抱けるか、感慨胸に迫つて撫然たり、彼れ猶ほ媽然として曰く、「東邦問題は、實に天下の大問題なり、余切に貴下の意見を聽かんと欲す、乞ふ徐ろに貴下の意見と、余の持論とを相戦はさん、貴下胸臆の意見を余に向つて吐露するの意なき乎、是を録して、バイアフォードの閑居に贈らば、余輩直ちに答書せん、貴下更に面談を望まば、來週水曜日、の午前を以て當館に第二次の會見を定め、以下必要に應じて、時日を協

定せん」と、遺がは世界知名のヂルク、事天下の大問題に關す、是を輕卒に論談するを避くるもの、一言大に余の意を得たり、即ち次週水曜日の再會を約して、第一次の會談を終る。

(其三)

越えて週日、十二月七日午前十一時、篠つく雨を冒して、中央記者既にスコオン街七十六番館の客室に在り、主公朝早くより例の乗馬運動に出で、未だ歸館せざればとて、机上のタイムスを執つて讀むもの少時、主公歸り來つて、挨拶終り、客に葉卷の煙草を勸めて、机の一隅に椅子を並ぶ、主公の風采以前の如きも、此日は至極沈重にして、顔容共にいと眞面目なり、余輩即ち口を開いて曰く、「支那帝國に起り得可き將來の運命如何、競争列國爭取の結果如何なる可き」と先づ漠然たる二前提を掲げ、彼の口を開くを待ち、徐ろに其意向を察して、余が胸臆各種の疑問を迸逸せ



しめんと試む、サア、チルク靜かに之に答へて曰く「第一問は假設架空の理論に過ぎ、第二問は至危至險之を論ぜば優に世界の平和を攪亂するに足らん、實際的政治家たるもの、架空の理論に奔る可らず、又平和攪亂の論談は深く之を慎しまざる可らず」と容を正して肅然たり。  
余輩滿腔の議論多くは支那將來の運命と、英露未來の進退に關す、されば彼れをして、支那分割若しくは露英衝突、二句孰れかを吐露せしめ、而して後極力之を抗爭せんと試みしも、彼れ曾て外務次官として國會議場に蝟集の質問を受け留めし技倆もて、架空世界に益なきと、危險平和に害なる談論を避くると稱す、余輩の論陣一言にして崩る、即ち他方面を顧み、忽然として問ふて曰く「貴下能く如何なる政策あつて、以て揚子江沿岸の大英利益を防禦せんとする乎」  
余輩の私見を以てすれば、英國が支那に對する今日の苦心は、如何にして支那を改革せしむるかに非ず、又如何にして支那分割を防禦するか

に在らず、如何にして支那に於ける英國の利益を防禦す可き乎に在つて、揚子江沿岸の防禦には上下殆んど肝腦を碎くが如し、是れ余輩の突然此疑問を發し、暗に英國若し獨力揚子江沿岸を防禦し得るの胸算ならんには、已に業に中央支那一帶の地方は、英國掌裡の占領地ならずやとの微意をほのめかせるなり、サア、チルク是に於てか、少しく彼が胸襟を開く。

「我英國政府は、支那中央部に於ける英國利益防禦の爲めに曾て何等の實行手段をも執らざりし、否、何等の手段を執る事も爲し能はざるなり、何となれば、英政府是れ支那政府に非ざればなり、英政府の今日以て揚子江沿岸に防禦し得可しと思推する政策は、即ち例の開戸政略に在つて、之を世界列國自由の貿易互市場とせば、世界各自の利益上、共に之が防禦の安全を期するに在り、是れ即ち我英政府が、米國貴國並に獨逸に此政策の協賛を求め、以て露佛の同意を得んと務むる



所以なり、若し是に反し、我穩當なる開戸の退嬰政策を棄て、支那陸海軍訓練の進取政策を執れりとせん乎、余は明らかに露佛侵略の驟退を意味す、露佛たるもの豈手足を縮めて退却せんや、必ず示威にも捲土重來の氣勢を東洋の天地に張らん、果して然らば天爲的の支那分割に、更に人爲的の支那分割を加ふるもの、我英政府は支那今日の實況に鑑み、世界平和の爲に之を取らざりし』

眞に着實穩當の言之を天下何人の前にも公言す可く、之を天下何人のにも實行す可し、しかも彼れ一己のサア、デルクを棄て、おのが反對の英政府に代り、最も苦悶の揚子江沿岸防禦を辯護す、英國絶對の利己主義と、之が實益防禦の苦心は、即ち此一言に透見し得可し、余輩一步を進めて曰く『貴國揚子江沿岸利益防禦の苦心、能く之を察するを得たり、知らず貴國何が故に日英米、獨を糾合して、開戸政略の退嬰に甘すせんより、進んで支那改革の根本的政策を斷行せざる、以上四國の聯合にして鞏

固ならば、露佛復能く何事をか爲し得んや』と彼は憮然として曰く。

『利害共に相違の四國、能く左迄進歩の聯合を爲し得んや、假令四國の聯合を爲し得たりとするも、支那政府自ら我れに改革の依頼を爲さるに、四國たるもの如何にして依頼なき支那を改革するを得んや』

余輩言を挿んで曰く『支那政府は曾て貴國に其保護を哀訴せるも、貴國是を却けたるに非ずや』彼れ微笑して曰く

『支那政府我れに改革を依頼せりと否々、左る譏なし、よし之れありたりとするも、支那政府は我れにギヤランチー(保證擔保)を與ふるに同意せずと承知せり、根底なき支那改革の美聲は、是れ畢竟空論に終らん而已、四國聯合支那改革の依頼に應じたりとせば、少くも四國聯合の兵先づ北京を占領せざる可らず、支那果して之を承諾するの勇氣と決斷ある乎』

時機既に熟して將に余輩の眞意を吐露するに可なるに似たり、即ち問



ふて曰く、支那の現状實に天下の平和を攪亂するの導火線たり、一韋帶水を隔て、最も支那と利害休戚相關する日本に執り、以て最良の政策と爲すもの何ぞ、貴説希くは聽くを得ん、チルク氏頭を振て曰く、余は英人なり、英國最良の政策を講ずるの外敢て他國の政策に喙を挿む可きに非ず、貴下日本人等宜しく、日本最良の政策を講究せざる可らず、余輩曰く、されば卿か余輩一箇の私見を述べん、余輩一箇の私見に依れば、朝鮮並に福建を介して、以て列國との衝突豫防洲と爲し、土地占頭には露を制す可く、自由商業の市場には宜しく英と競ふ可し、露若し朝鮮を冒さば、露と戦ふ可く、佛若し福建に迫らば、以て佛と戦はん、されど露若し朝鮮を冒して、佛是を輔くる乎、佛若し福建に迫つて、露是を援ふの曉は、日本他日露佛聯合、英と東洋に争ふに當り、英の孤立を助くるを質とし、以て英の援助を仰ぎ得可きや如何、言未だ終らず、チルク氏手をもて是を制して曰く、夫は決して口外す可き言に非ず、日本若し露と戦ふの眞

意を以て、日英同盟を希望せりと知らば、英國輿論の感情を損ずるを知らざる可らず、されど貴下強て余の私見を聽かんとすれば、余は云ふ、佛は朝鮮に左せる利害の關係なく、露亦福建に同様の利害なし、されば露佛豫じめ聯合以て、日本と戦ふの決心を以て、露の朝鮮を冒し、佛の福建に迫るが如き事なからん、英露の衝突亦然り、露の印度侵畧は今や殆んど論外に屬し、露佛の聯合支那に於ける英の利益を侵すと云ふも、是が實際積極の影響は猶遙かなる未來に屬し、貴下一度活動の政界に處せば、未來の決して語り得可らざるものあるを知らん、と余輩即ち日英同盟の直接談を茲に止め、更に英米同盟の間接談に及ぶ、チルク氏余の質疑に應じ語つて曰く、

『西米戦争の結果は、米國遂にフヒリッパカン並に古巴の群島を獲たり、米國依つて兩群島に保護關稅を輸入せば、英の通商を沮んで、或は英商の感情を害せん、されど保護的自治の政治を布かば、現時列國の』



通商に變化影響を興ふる僅少にして止まん特に米國は漸次太平洋に利害の關係を有し來つて是れより將に米國商業の大に發達せんとする支那帝國に於ける低廉の關稅を維持せん爲には平和的手段に依つて歩々我英國と提携す可きの道理ありさればこそ米國社會近時の輿論は將に大に熟し來つて支那開戶政策の下に日英米の提携聯合を産み出せり一方に在つては露佛の支那分割政策他方に在つては日英米の支那開戶政策獨は確に此中間に立ち露佛に與みして支那分割に進まん乎日英米と提携して支那開戶政策に熟し暫時支那分割の手を緩めんかど彼は大に彼が自國の利益の爲に熟考せり彼が熟考の結果は露佛に與うして支那分割に加はらんより日英米の提携に伴ひ開戶政策の下に並び立つを利益として膠州灣の自由貿易港たるを天下に公表せり是を列國が支那に於ける目下の態度眞況と爲す果して然らば未だ太平洋面に戰鬪を開始す可く適

當ならざる露國は少くも我々汲々として是が準備を整頓する間四國聯合の開戶政策に加入して支那分割の手を緩むるの外なからん是に於てか數年の平和は支那の天地に維持せられ得ん後は歐洲政界の動靜に依つて變ず機微は神智に依つて察す可く人言以て語る可らず』  
談論平易些の奇なし而も正々堂々たり過去の實相を精査して以て將來の動靜を測度す一言一句誤り得可らざるものに似たりチルク氏更に語を繼いで曰く  
『夫れ英の他國と同盟するに反對するもの一は他國と同盟して歐洲列國の政界に於ける不羈自由縱橫自在の運動を妨ぐるを忌めばなり二は英國他と同盟を訂するも徒らに列國政界自由の活動を制縛して是に代る英國致命の利益例せば印度帝國防禦の如きものに對し曾て些少の利を興へざればなり依つて計るに英米兩國の關係は



人種宗教言語文字を共にし、其政態を異にせるのみの同種屬而して是が兩國國民近時の感情、日に月に深厚の友誼を加えんとするを以てすら、是れより英米同盟の境域を望めば、前途猶悠遠たり、前途猶悠遠たり。

さらば日本の爲に計るに、日本能く獨立獨歩、歐洲列國の政界に縱横自在の活動を爲し得可くんば、不羈獨立の大飛躍を爲すに如かず、敢て是を爲さんよりは他に利益の途ありと覺らば、先づ列國相互の政策上、孰れか最も日本に利益適當なるかを熟慮し、是ど同一の歩調を合するを宜しとせん、余の私見を以てするに、日本は中央支那に自在の通商を爲すに於て、我英國と相互普通の利益を有するものなれば、日本、自己の實利實益上、開戸政策の維持に對して、我英國と活潑の提携を爲すを以て良策とせん歟』

腹になきものを口に云ふの東洋政治家と、腹に餘つて口に發せざる泰西

西政治家とは實に天地宵壤の相違なり、始め余輩の彼れに求むるや、支那將來の理想を以てして、却つて現時の實相を説き示さる、而して泰西知名の政治家中、最も理想の談論に、龍雲虎風の概あらんと豫期せられしヂルク氏にして、今や即ち一言一句責任を重んじ、敢て架空席上の談論を快とせざる斯の如し、別るゝに臨んで彼れ深く當時の談論を公刊するを戒しめ、強ひて公刊を望まば、其公刊に差支へなき箇所のみを秘書に命じて筆記せしめんと約す、此夕余輩寓居に歸るや、ヂルク氏長文の手翰既に机上に在り、彼れ手づから當時談話の一部を抄記し、是れより以上は悉皆公刊を避くと謂へり、即ち該書の要領を摘んで當時談話の一斑を録す、依つて余輩の會談は茲に留らざる可しと雖ども、余輩がヂルク氏の訪問記は遺憾是を最終の報とす可し。

### ○大英知名の財政家を訪ふ



曾て東部倫敦の貧民傳道に名あるアラウン嬢の報告會に招られて、アラウン嬢の集會に列す、年齡七十餘りなる司會の一士、容貌風采、恰も田舎紳士の如きもの、アラウン嬢の報告に繼いで演説せり、嬢の嬌音、朗明として音樂の如く妙なる、田舎紳士の濁聲、斷續砂を合んで言ふ如くなる、恰も三保の松原に天女の歌舞を、擬稱して、後に吃又平の述懐を聞く如く、滿場肅然傾聽せるも、余獨り華胥の郷に逍遙したりき。後ウエストミンスターに、故具翁の國葬を看る例の、田舎紳士揚々として、具翁親友の例内に、濶歩す、噫此田舎紳士抑も是れ何人ぞ、夙に財政の統計を以て、其名天下に隠れなき、サア、リチャード、テンブル即ち此人也。サア、テンブルは、千八百二十六年に生れ、ラグビー校に學び、英米大學より名譽博士號を受け、印度外務財政の局に當るもの、前後三十年國會議員たり、倫敦學務局の副頭たり、保守黨の評議員たり、著書十數卷、皆廣く世に行はる、千八百七十六年功を以て初代のパロチッチーに叙せられ、

ケンブセイの附近に、千エーケルの地を領し、悠然著書に其晩年を樂しむ、大英知名の財政家として、又田舎紳士の好標本として、サア、テンブルの如きは、隻手屈指の内に在らん歟。テンブル一日書を中央記者に寄せて、ハムステッドなる倫敦邸、ヒース、アラウン嬢に會談を約す、ハムステッドにジャック、藪城と稱する有名の旅館あり、ヒース、アラウン嬢は是が背後に在り、跼蹐として小門を潜れば、是が千エーケル大地主の控邸かと訝らるれど、案内に連れて書齋に通り、一方の書架に、光輝燦爛眼を眩する許りなる、高尚優美の書冊、整然列を正せるを見て、他方破璃障子を隔てし前面、丘陵起伏人家煙靄の裡に、隱顯するを望まば、遠がに主人が胸憶の趣味も計り知られて、奥床しくぞ思はるゝ。須臾にして入り來れる主公、テンブル、七十三歳の高齡に似ず、鍍鏤として壯者の如く、身に縞地フロツク、モーニングの折衷服を纏ひ、鈕孔の四



周手垢に黒めるも平氣なり、握手寒暄を叙して、主客椅子を暖爐の前に並ぶ、主公の巨眼寄る年波に半ば隠れて、恰も巖下の電の如く、拳大の鼻頭丹朱の如く閃めきて、巖下の電と光輝を競ひ、鼻下の鬚領下の鬚蓬々として霜に倒れし雜草の如く、餓豹の嶋を負へるも、鬪鶏の敵を睥睨せざるも能く主公が中央記者を睨み詰めたる其顔貌に比す可くもあらず、而して其言ふや口角常に泡沫を飛散して、一言一句記者の滿面雨霰に打たる、而も是れ千エーケルの大地主、大英知名の財政家にして言動共に莊重坐ろに敬意を表せしむ。

訪問の主眼は外資輸入の談に在りしも、先づ主客の口を衝て出づるものは、例の東洋問題なり、サア、テンプル曰く「貴下の今引照せるが如く、余が近著『繪畫的印度』に序せるが如く、支那問題は既に間接に印度に影響し、今後益々影響せん、仰も支那に於ける英國商業並に勢力の區劃と稱するものは、楊子江沿岸上下一帯を總稱するにて、少くとも楊子江口より

り上流の早瀬即ち雲南四川に於ける山岳の境界迄を意味す、即ち楊子江は其上流の境内に於て英人是を砂金江と呼ぶ、ダリフの附近に延び、メーコン河の上流を歴し、印度所屬ビルマのサン諸州に連続せり。

此故に上ヒマル即ちアゾアの首都マンガレイより、雲南に於ける支那境界に侵入せんとする英國鐵道は、資本既に集まり設計既に政府の認可を得て希設線路の測量は英清の境界なるサルウイン河岸、カウロン

の渡津迄を終れり、されば我英政府は今回支那の政變以來、他の既得の線路よりも、先づ此鐵道の竣成を急ぎつゝあり、此鐵道にして落成の曉は、必ずや茲を終點と爲す可きに非ず、將に是れよりメーコン河に進み、メーコン河を横斷して、雲南の平原を侵し、以て楊子江下流と連絡を通せん事、數の甚だ見易き所にして、ビルマ鐵道設計の當時は、支那政府の同意を得ん事、未だ疑問の裡に在りしも、今回の政變に徴して、英國今後此權を掌握するは、實に掌を反すの易き而已、况んや英國のエナアショーと



リソースを以てせば、四五年を出でずして、能く是を竣成するを得可し、既に隴を得て更に蜀を望むは、我英國の如き勢力充實内に満ちて、自然外に溢れ出づる國力に徴して實に止む能はざるの勢なれば、ビルマ鐵道決して雲南の平原に終局せず、タリフに進み金沙江に出で、揚子江を下つて上海に達するは必然の勢力なり。

我英國の施設は實に斯の如く遅々天下を驚かすなしと雖ども、鞏固確實東に上海を望み、西にマンドレイを控へ、日夜此中間に活動しつゝあるなり、而してマンドレイ及ラングーン間には、既設の線路既に在れば、ラングーンに於けるベンガル灣より、上海附近の太平洋迄、全亞細亞大陸中至好至美なる東南沿岸無慮三千哩は、中に佛領を挿むと雖ども、實利實權我英國に歸せん事、是れ實に天の命ずる所にして、世界到國能く是を如何とするなからん。

露國西比利亞鐵道を經營すとも何かあらん、彼れ鐵道を以て來らば我

れ鐵道を以て迎え、彼れ銃砲を以て來らば我れ亦銃砲を以て是を迎ふ、最後に斷乎たる此大決心を備へてこそ、能く我政策を實行し得るなれ。

貴國は如何貴國は如何、假令銃砲の戦争に支那に勝つとも、平和の戦争に能く列國と鹿を中原に争ふのニナアヲ一並にリソースありや、支那將來の運命は偏に列強の意嚮如何に罹つて存す、一國是を分割せんと欲するも、列強是を支ふれば、決して分割の實行せられ能はざるが如く、一國是を維持せしめんと欲するも、列強是を分割せんと務むれば、決して支那を獨立せしむる能はざる可し、故に列強は支那平和の天地に於ては、列強自ら平和の戦闘を競ひ、一朝銃砲の戦闘爆裂するあらば、列強競ふて是に應ずるの策を講ず、平和の戦闘即ち鐵道權、鑛山權、商業權の分割は是れ銃砲戦闘の準備たるに外ならず、看すや支那第一着の分割以來、列強皆此準備に孜孜々々たるの光景を。

貴國此間に處し、果して何の施設する所ぞ、果して何の施設し能ふ所ぞ、



然りと雖ども決して落膽し沮喪する勿れ須らく實力を培養して、一向時機を待つに如かず、我英國は貴下も知らん、口狽りて同盟を語らずと雖ども、其機到來せば決して實行に躊躇せず、米西戦争に於ける我英國隱然の援助を看よ、露若し朝鮮を侵して貴國是と戦はば我英國は必ず德義的援助を貴國に與ふるに憚らず、何となれば露にして朝鮮を根據として、更に南下の大海軍を茲に集めん乎、露英海軍互角の勢ひ茲に成つて英艦隊の是を防禦せん事、實に容易ならざればなり、故に佛にして萬一露を援けて貴國に迫らん乎、英は斷然貴國を輔けて佛を制せん、余は決して佛をして斯かせしめじ、余の同志少くも我保守黨の多數は、皆此意見を有す、既に諸名士を歴訪せるの貴下は、或は余の言を以て疑はしど爲さん、彼は非と説き余は是と斷ず、貴下益す我名士に接する多くして、愈よ各士持論の相支吾するに驚かん、されど多數の輿論決心なる者果して如何を察せざる可らず、余は是を貴下に斷言す、余と余が黨

の輿論決心は、東洋問題に關し、獨り日本をして露佛の衝に當らしめざる可し、何となれば日本萬一露佛の同盟に屈せば、東洋に於ける露佛勢力の伸長、即ち是れ我英國勢力の枉屈を意味するものなればなり。とは云へ是は英國多數輿論決心の種子なり、根本なり、底意なり、時と場合と行掛りを問はず、必ずしも常に斯くある可しとは云ふ可らず、さればこそ相互に外交運轉の妙用あつて、種子根本底意を實にするの運動怠りある可らず、頃日佛國の支那に於ける運動に對し、英國是に反對して日本是を輔けしと聽く、是れ大に可なり、北京に於て英國が日本に望むの好意は、東洋に於て英國が日本に與ふるの好意を意味す、北京に於て、日本が英國に許すの好意は、日本自己の實利實益を控除し去つて、是が剩餘は日本が東洋に於て、我英國より割り戻しを受くるの好意たるを骨銘せざる可らず、常に同一利益の下に立つて、以心傳心の好意を交換しつゝ、進行せば、我英人は容易に他國に許さざるも、又容易に他國を



賣るものならず。佛は頻りに各地問題を提出して、我英國に當らんとするも、佛最早や恐るゝに足らず、獨は頻りに必死奮勵せりと雖ども、獨未だ猶恐るゝに足らず、憂ふる所は獨り露なり、露の牝大鈍經にして、致命の攻擧點少きには閉口なり、旅順の如きは議論あらん、過去の議論はなきに如かず、死兎の齡を數うるを止めて、鈍經の露國茲に神經の關節を集め、財力兵力の集注點を新設したれば、我に執つて致命の好攻擧點を増加せられたりと相祝賀するの大量なかる可らず

『茲に於てサア、テンブルは、其舊著(六十年間女皇の治世)より英國財力の統計を列舉し、此書を余に贈らんとて、共に書架を歴覽するもの數分、且つ談じ且つ搜索して遂に得ず、余は是を書肆に求む可しと約して、總てサア、テンブルが極力列舉の統計を忘る

輸入大に可なり、低利外資の誘導は、是に倍する利殖を得可き直接利益の外、更に貸借兩國間に離る可らざる、親交を増進する間接利益を認めざる可らず、英米親交の原因は第一英の資本米全國に撒布せるにあり、日本の外資輸入大に可なり、早晚日本は外資輸入の時機あらん、費途並に返済の方法鞏固なりせば、外資輸入は實に有益無害にして、倫敦市場絶えず、金錢干満の時機あるも、日本輸入の外資に應ずる底の金錢には不足なし、されど民間私立會社の外資輸入は其可を見ず、日本政府の保證なくして倫敦市場に何の名もなき信用もなき私立會社が、能く如何にして外資を輸入するを得んや、果して低利の外資を輸入せんとならば、宜しく日本政府の公債たる可し、國債も一個人間の貸借も、決して異なるものに非ず、誰か極東見ず知らずの私立會社に何の保證もなくして、鉅萬の外資を投ずるものあらんや、地位を轉倒して是を想へ、能く日本に倫敦有名の會社にさへも其資金を投ずるを肯んずるもの幾人か



ある。

余は日本政府に非ずんば外資輸入成り難しと信ずるものなり、而して政府輸入の外資は是を交通運輸の如き國家事業に費やすは勿論、民間過大の膨脹事業に失敗して、今苦境に沈淪せるものを救済せんなどは断じて不可なり、一時過大の膨脹事業は常に反働の苦境に沈む、列國皆此苦境を實踐し來らざるはなし、個人の愚擧は宜しく個人の苦痛を以て支拂はしめよ、政府断じて直接に干渉す可らず、直接に救済す可らず、况んや外資を輸入して、間接に是を救済せんなどは以ての外なり、資下は頻りに問ふ、此間に施す何等かの良藥なきやと、余は答ふ断じてなし、如何なる名醫も茲に到れば匙を投ぐと』

別るゝに臨んでサア、テンブルは、其令息曾て日本に遊べりと語り出で、談日本の美術に及び、口を極めて嘆賞措かず、日本の磁器、陶器、漆器、象牙彫刻は、優美高尚確に世界一たりし、確に世界一たりし、知らず今後猶世

### ○軍事通信の日下開山を訪ふ

時日は明治三十二年一月九日、場所は倫敦ゲリツク街に巍然雲表を凌ぎ、劇道改善の目的を以て學士粹客茲に集ふと聽えたる、ゲリツク俱樂部の大食堂、四周の壁間には、古今男女名優の肖像を掲げ連らぬ、學士粹人思ひくゝの食卓に就けり。是が一隅の食卓に對座の主客「牛舌魚」のフライを賞玩しながら、亞米利加人の我英國を羨むもの一、フライの魚に牛舌魚なき事是れ也』と微笑の主人は年齢今や七十九歳、身に古風、黒のフロツクコートに纏ひ、クラッドストリン流の白襟に、黒色蝶形の襟飾を附け、短軀肥容、鶴髮童顏、白絹の如き頭髮を後方に撫でつけ、鼻下八字の白髯を短かく刈れる態



度容貌、恰も福祿壽の長頭を切り鬚髯を剃つて、鬼一法眼の撫でつけ頭に白絹を植えたるを代用せるに似て、一見温厚篤實莊重寡黙の君子たるもの、是ぞ軍事通信の日下開山と雷名世界に轟ける、サア、ウヰリヤム、ハワードラッセルにして、對座異邦の若紳士は、讀者舊知の中央記者也。サア、ラッセルは、千八百二十年愛蘭に生れ、愛都ダブリン大學に學び、千八百四十五年乃至六年間に起れる、愛蘭馬鈴薯饑饉の慘況を通信せるを以て、氏が新聞記者たる執筆の始めと爲し、年殆んど三十、タイムスの軍事通信員として、噫馬戦争に従軍せるは、氏が軍事通信の大名を爲せる初陣なり、越えて千八百五十四年乃至六年、是ぞ氏が有名なるクライミヤ戦争の従軍にして、氏は其著「クライミヤに於ける英國の遠征」に序して云へり「余は真先に土耳其の地を踏みし、英吉利軍隊の先發隊と共に在りき、而してサクタリ、ヴァーナ、オールドフォート亦先發隊の中に在つて、アルマ、バラクラバ、インカマン、セバストポール、タアナヤの戦況

一として親しく目撃せざりしものなきは、實に余が至大の幸福にして又我軍隊のクライミヤを撤去せし最後の殿軍中に在るを得たるは、余が無上の幸福なりき」と、當時壯年意氣天を衝けるラッセルは、銃鋒刀劍よりも鋭き、椽大の筆を執つて縦横無盡に戦地の實況を描出せしかば、五萬のタイムス七萬に増加し、氏が實見の批評的廣告と、主筆ドレインが痛快なる軍隊組織の攻撃論は、遂にニューカッスル侯をして、タイムスの愛國心に哀求するに至らしめし、氏が報告とタイムスの掲載は終始一貫、世界新聞ある以來、タイムス新聞の大成功、天下軍事通信あらん限り、ラッセルは是が日下開山と世界に仰望せらるゝに至れり。爾來數十年、第三陣には印度のミューチニー、第四陣以太利戦亂、五陣米國南北戦争、六陣噫馬戦争、七陣普澳戦争、八陣普佛戦争、九陣南弗戦争、十陣埃及戦争に従軍し、殆んど戦場に起臥するもの十餘年、彈丸雨飛の間に馳驅する前後數百戦、今や年老いタイムス社の養老年金に、老後の餘



榮を樂しめるも、斯る名譽の軍事通信開山なれば、スエズ運河の開通式には、埃及王の國賓たり、ウエルス皇太子印度漫遊の當時には是が名譽の秘書記たり、千八百九十五年叙爵せられて、サア、ウヰリヤム、ハワードラッセルと名乗る、是れ即ち中央記者を、ケリック俱樂部の畫齋に招ける主人ラッセルの略歴なり。

されば中央記者と、サア、ラッセルの會見は、恰も國性爺に於ける、和唐内とカンキの對面に均しく、『御身が泰西開山の陸戰通信記者ならば我れ亦東洋無双の海戰從軍記者なり』と、高島屋の假壁にて見得の一つもある可き、大向ふ二千兩の受け場なれど、噫止みなん哉止みなん哉、サア、ラッセルは、大英タイムスの從軍記者として、十年百戰を、彈丸雨飛の裡に經過せし、世界名譽の老功記者、我は唯日清海陸の戰鬪に始めて砲火の洗禮受けし、黃口乳臭の若輩記者、即ち我國民の寄贈にかゝる、青貝象箱の印紙箱を、サア、ラッセルに進呈して曰く、『我軍事通信員の、貴下の鼓吹

に依つて我國家と我新紙に勤めしもの鮮なからず、此一小箱元價値なし、而も國民の寄附より成つて、遂に余に贈られしもの、是を世界軍事通信開山の机上に置くの榮を得ば、我國民が余に寄贈の真情も亦空しからじ』と、恰も机上に於ける、張良の黃石公に仕ふる如くす、サア、ラッセル大に喜んで是を受け、深く我厚意を謝し、從軍記者亦政府の論功行賞に預れるを問ふ、余曰く、否余輩政府より何ものをも受けず、然れども陸海數十の從軍記者中、獨り余の僥倖多福なる、此名譽勳章を軍隊より拜受せり、とて、浪速艦下士以下總員の恩賜なる、余が重寶の時計を示し、サア、ラッセルの嘆賞を博せし、瞬時、生れつゝいたる中央記者が高慢の鼻は、其伎倆猶五條橋畔の牛若に如かずして、胸裡私かに鞍馬山の僧正坊を凌ぎしかと思へば、極東島國民の盲蛇根性、今にして根治全滅の難きを知る。

畫齋後食堂を出で、喫煙室に入り、共に珈琲を喫しつゝ、話頭一新問ふ



て曰く「貴下の實驗に照らして未來の大戰場を、世界何處の地方と見るや」ラッセル答へて曰く「余の胸中更に此の推斷を爲し得可き根據なし、唯近來佛國は頻りに我英國と各地問題の衝突を惹起せり、されど露にして佛を援けざらん乎、佛は獨力我英國と開戦し得るものならず、露果して萬一佛を輔くとせん乎、獨は歐洲自己の均勢上露佛の成功強大を欲するものに非ず、爲に或は歐洲中原の大禍亂を湧起するに至らん乎、是れ既に萬々一を想像しての臆談なり、戦争は即ち勝敗兩國の最大難事、歐洲列國今や戦争の愈々益々難事たるを、深く骨銘せざるものなし、英佛問題を外にしては、列國寸土尺地を亞細亞方面に争ふに忙はしきも、亞細亞方面は未なり、歐洲中原は根なり、枝葉の問題施て根本に及ぼすは、先づ豫じめ餘程の大問題に迄、進行發達せざる可らず」と問ふ「將來に日英兩國從軍記者の、共に戰場に友とし見るを夢む、貴見如何」と、ラッセル微笑、大に余が言を壯とし迎へたるも、更に一步を進めて「日英同盟

に對する高見は」と問へば、彼れ輕く「兩國隔絶海山萬里」と答へて止む、是れ大英大多數の意見と覺悟は、英露支那に衝突すとも、一旦既に開戦するの曉は、是が致命の大戰場は、無論歐洲相互の首都に在つて、日本の應援は僅に部局の枝葉なるを確信し、又既に英人の開戦を覺悟する以上は、一己單獨にて財力武力の繼かん限り、戰鬪を持續し得るの盲信あればなり、此意見と盲信あるの英人は、常に日英同盟を笑つて云ふ「日英隔絶海山萬里」と、是を正當に解釋せば、日本は極東問題の根源地たる、歐洲中原に手を展ぶる實力なし、唯日本自己の利益の爲に、極東の小局に應援し得るも、夫は猶開戦の覺悟定つて後、是を得るに遅からず、况や日英兩國の商業利益は必然極東に衝突せざる可らざるに於てをや、何ぞ豫しめ日英無川の同盟を訂して、英國縱横自在の外交に、手足纏ひの厄介物を蛇足せんやと謂ふに在り、日本より見ば如何にも残念至極なれど、我れ英人として將來の理想を去らば、復必ず斯く謂ふものゝ一人なら



ん、英國の眼より見る日本の位置、真に斯の如きに過ぎざればなり。世上諸般の茶話、是に繼ぎ、ラッセル其令息を長崎に喪へるに談及し、愁然殆んど涙下らんとす、余是を視るに忍びず、即ち話頭を轉じ、別辭を敍して立つ、ラッセル脚疾を惱み、杖に縋つて起ち、愁氣漸く散ず、別るゝに臨み請ふて曰く、『大英新紙の發達進歩は、貴下並にアーチボルド、ホーブスの外、是に繼ぐの軍事通信員を出さざる可し、獨り國家の地位と、新紙發達の程度に於て、能く軍事通信の衣鉢を傳へんもの、恐らく我日本に於て是を望み得ん、貴下願くば日本將來の軍事通信員の爲に敢て一言の訓戒を與へよ』と、ラッセル言下に應じて曰く、『夫れ筆を執つて戰場に立つもの、是が實況を露出せば、時に軍隊政府國民の憤怒を買ふを免れず、而して曲筆軍隊政府國民の意を迎へん乎、是れ曲筆阿世の虛言者なり、此間に處して能く其宜しきを得る、是れ軍事通信至難の關なり、筆を載せて眞理の戰場に出陣するもの、須らく眞理の爲に戦死の覺悟な

る可らず』と、噫、ラッセルの大名を爲す實に依つて來る所の素養あり、今にして是を想へば、ラッセル當時の顔容、髣髴として我眼前に顯はれ出で、凛たる正氣坐るに懦夫をして起たしむる覺ゆ。

### ○『評論之評論』の主筆を訪ふ

『評論之評論』主筆露帝主唱の萬國平和會議に對し、列國の意向如何を探究せんとて、筆を載せて歐洲列國を漫遊し、露帝ニコラス二世に、リヴァヂアの離宮に謁し、萬國平和順禮の滑稽を仕組んで歸倫す、即ち一書を中央記者に寄せ、ノホーク街なる『評論之評論』社上、一朝の快談を盡くさん事を約す、『評論之評論』主筆なるものは誰ぞ、ウヰリヤム、トマス、ステッド氏は是れ也。

ステッド氏は千八百四十九年の産、ウヰトリック、フヒールドのシルコイツ校に教育を受け、十四にして新城の職工徒弟たり、二十二にしてダアリ



ントンなるノーザン、エコーの記者たり、後倫敦に出でベル、メル、ガゼツト記者として、メーデン、ツリビュートを草し、爲に三ヶ月の禁獄に逢ふ、千八百九十年倫敦に於ける『評論之評論』を發行し、翌年亞米利加の『評論之評論』九十四年濠洲の『評論之評論』を發刊す、著書少なからず、列國旅行の路程亦廣からざるに非ず、曾て倫敦の饑寒窟を探險しては、一世の耳目を驚かし、露國先帝アレキサンダア第三世に拜謁しては、露帝の辭下るを待たず、椅子を離れて立ち上り、我れより袂別の辭を述べて下りしかば、古今帝王の拜謁に類例なく、我れより帝王をヂスミツスするの大缺禮を施せりとて、一時の笑話に残りしかば、ステッドの氏名は『評論之評論』の人氣普及と共に、世間に知られし多少有名の一人なるも、露國の金員を受け露國の爲に執筆せりと、の舊嫌疑は、未だ以て世人の惡感を一掃する能はざるものゝ如し。

豫定の刻限、余輩評論社の階上に到れば、ステッド氏來客に接して、編輯

室内笑聲起る、待つ少時にして氏は來客を送つて出で、客と袂別の辭も終らず、早くも余輩の手を携へて編輯室に入る、室内一面の壁間には、列國帝王名士の大版寫眞を密貼し、街路に面せる一窓の下に、ソーワアを安置す、今仰向けにソーワアに倒れ依りて、後頭部を窓の玻璃にもたせかけ、恰も我薩摩軍人の一士、柏田盛文氏の風采に、渡邊洪基氏の容貌を併せ、是れに濃短有麻鹽の鬚髯を加えし如き、英蘇人よりは寧ろ猶太人種に近く見られし一士、宛然蓄音器の蓋を去れるが如き、英人の婦人を評して云へる、チャツタア、ボツクス(お饒舌り箱)を開けば、即ち斯くもあらんかと思はるゝ程、獨り合點の獨り饒舌を試むるもの、是ぞ即ち日本などに雷名響ける『評論之評論』主筆ステッド氏にして、讀者若し蓄音の受聽器を耳にせば、氏がお饒舌りの聲、即ち左の如くなるを聽かん。

『ヤ君奥さんも御一所か子(僕のマントルピースを飾れる、大英諸名士の寫眞内には、萬緑叢中的一点紅、即ち未來の奥さんらしき寫眞もあるか



も知れぬが、未だ夫婦同伴の御洋行と見られる年齢でもない、可惡想に左様サ君の年齢は多く積つて二十五六歳とより見えぬが、ナアニ君僕は二十四で結婚したのだヨ成る程併し君の結婚談よりは、歐洲漫遊の平和會議探險談を承りたい。ソカ僕が今度の旅行は、實の所支那方面の危急より、東洋の動靜如何を探究せんとの素志だつたのサ所が世界の大問題たる、平和會議が提出せられたじやないか、茲に於てか此大問題に比較せば、支那處分問題などは云はれ未サ故に僕は素志を變じて是に對する歐洲列國の意嚮を探り併て露帝に拜謁して歸つた譯である。露帝に拜謁當時の模様並に談話は如何でした。夫は君今精確に露帝の一言一句を、茲に繰り返す事は出来ぬが、僕の露帝と會談せし時帝は明らかに如何なる意思より、彼の世界を驚殺せし萬國軍備縮少會議を創宣し玉ひしか、帝の意思の在る所を、充分僕に洩らし玉ふた、現今の露帝は、能く世人が正直な馬鹿で、獨逸皇帝が狂氣だなど云ふが、

中々君そうでないヨ、先づ僕の見解では、當今世界第一流の帝王だ、其莊嚴なる僕が曾て會談せし、シヨン、ブライトよりも、又先帝アレキサンダアよりも、今帝の方を上置かざるを得ない、其所で露帝が萬國軍備縮少會議創宣の眞意は、即ちコウサ。朕は世界を見渡せり、朕は世界の所謂文明を見渡せり、而も甚だ世道民福に善良なるを見出す能はず、朕は歐洲列國が、猶各國の未だ占領せざる地方に向つて、競ふて領土を獲得し、又争ふて獲得せんと務むるを見る、而して歐洲列國領土の擴張なるものは、其擴張を受くる地方の土人に對して、果して何の益する所ぞや。阿片酒精惡疫流行、扱ては治者被治者の大隔絶、所謂其文明の民福と稱するものに對して、負擔に堪へ得ぬ租税を課せらる、而して又是を獲得せる國民に對して、果して何の益する所ぞ、疑懼猜忌競争の絶へざる増加に繼ぐに、艦隊陸兵の大増設を以てせざるはなし、陸兵と艦



隊は以て世道民福に益す可き、天下百萬の壯丁を駆つて徒らに無益の軍役に編入せしむるに非ずや。世界各地鉅萬の貧民を看よ、不滿の念慮充滿して、社會主義既に熟し、今や無政府主義の形體續々湧起し來る、朕等何故に斯る状態を啓導せざる可らざるや、満足なる體軀を有せる壯丁は、悉皆駆つて軍籍に編入す、是れ明らかに社會組織の纖維を寸断するもの、如何なる國家も破産を眼前に見ずして、此危機を進行する能はざらん、加ふるに現時日進の精巧武器を以てす、噫、世界孰れの國家も、其士卒の大部を殺し盡くす覺悟なくして、誰か能く戰場に臨み得るものあらんや、朕は如何なる國家と雖も、一度戰場に旗幟を翻へすもの、假令勝利の好果を獲とも、能く無政府革命の變亂是れに繼がざるを保するもの、全世界断じて一國も是れあらざるを確信す。

露帝の眞意は即ち是れだ、是れ即ち僕も大に露帝が赤誠を推せる此

難有き勅諭に對して、及ばずながら大賛成を表し、各國聯合の平和巡禮を組織せんと務むる所以、ダーチ(露帝)の誠意は萬口一様皆是を信認する様だが、ムラヴフ伯の外交手腕と、實際的政治家としての責任ある意見が聽きたいものだ。ムラヴフ伯か、アリヤ君表面に繰つられて居る人形、ダーチ、露國政界の黒幕は、露帝を中心として陸軍大臣クロバトキン、將軍、露國の財政を整理したるウヰット氏、露國外務省内實際の大臣ラムストツフ伯、此四人が眞正に萬國軍備縮少會議を主張して居るのだから、本家の露西亞はソリヤ大丈夫なものサ、それでは同盟國の佛蘭西は如何だ、佛蘭西は先づ第一の難物だよ、併し是れとても、レベンチの大聲衰へ、各方面の殖民事業意の如くならず、内治外政日に非なる今日、加ふるに同盟兩國間の豫談もあれば、飛放れて大賛成をせぬと云ふ迄サ、サアそうなるぞ、英、米、獨、澳、以、西、皆大賛成だ、獨り東洋の日本は如何だ、頻りに陸海軍を擴張して、世界の日本など、誇稱して居る様だ



が、全體日本の軍備は、ドレ程擴張する筈か(ナアニ極少々々サ、陸軍が六師管十二師團で海軍は二十餘萬噸、云は、日清戦争前の先づ二倍で、今後四五年西比利亞鐵道の竣成頃には、悉皆其緒に就くの豫定ナ、サ)實に君の前だが、随分突飛の大擴張じやないか、如何しても日本は悪戯を爲出来しさうだヨ、世界何處の國の目より見るも、東洋に悪戯を爲出来す腕白小僧は、先づ第一に日本とチャンと指を折られて居る(待ち玉へ君は評論之評論前號にかう書いて居る「軍備擴張は列國民に對する激烈の酒精にして、日本は極東に於ける酒精中毒患者なり、日本は既に軍備擴張の酒精の爲めに、殆んど破産の苦境に呻吟せり」と、實に近來の卓見である、内財政の整理に苦しみ、外臺灣の經營にすら困厄し、日本は今や全く貴説の如く氣息喘々サ、然るに君は日本破産と大書した、其墨汁の未だ乾かざるに、日本を悪戯の腕白小僧など、は酷い、腕白などする餘裕が何處にあるものか、東洋悪戯の張本者は、是を君の賛成する露國

に廻はそう) イヤ、如何しても日本は悪戯を爲出来すに相違ない君等は露西亞！露西亞！と云ふが見玉へ支那第一着の分割でも、是を露西亞の方面より云へば、獨逸先づ膠洲灣を占領し、露西亞手を空しふして傍觀せば、我英國は旅順大連を占領するは極まり切つて居るぢやないか、ダカラ露は受働防衛上、止むなく旅順大連を占領したので、云は、列國各々自己の實利實益を防禦するに務める而已サ、何も東洋人が露西亞を怖るゝ、他歐洲列國に異なる謂れは少しもない、世界列國の帝王中、露西亞皇帝程、東洋異色の人種を愛し、露西亞政府程、東洋異色の國民を優待するものありやしない、云は、露國政府と露帝は、歐洲列國の政府と帝王中、最大無双の東洋最負、黄色人種無上の親友である、然るに謂はれなき東洋黄色人種は、是を憎み、是を嫌ひ、是を退ぞけ、是を劣等人種視する他の歐洲列國には、却つて親しみ近づき、是を優待親愛する露國を忌み怖る



いは、大に冠履顛倒ではないか、君は一體如何思ふ(僕等日本人は何とも思ひはしない、又徒らに露西亞を怖るゝものでもない、併し是を怖るゝものありとせば、夫は君の所謂露國と露帝が、他列國を抜ける異色人種、懷柔政略を以て、將來無邊の大望あるものと見做すからである、君は露國と露帝の東洋最負と云ふを以て、彼が管下に支配せる異色異種の人類夥多なるをも問はず、唯恰も痴人の戀愛の如く、心底より黄色人種を愛す可き、天賦の性情を有すとの御意見ですか)ソ一云ふ譯でもないが、何も長匙(モスコー、シベリア、シベリア)氏(殖民大臣)チエソバーレン氏を指すの様に、露を惡魔視するにも當らない、だから僕は世道民福の爲に、露帝の平和會議に賛成して、今回各國聯合の平和順禮を主唱した、昨日も其大會を聖ゼームス館に開いて僕が演説した、中々盛會であつたぜ、ア、其案内状を差し上げなかつた子、惜い事惜い事、日本の意嚮は如何だ子、萬國平和の順禮に賛成して呉れようか(無論日本は君の御名論の如く、軍備の爲に破産の

境遇賛成するとも賛成するとも、が乍し平和順禮の前に烏渡軍備縮少會議に對し確固たる責任ある順序方法を聴きたい) 夫は君如何にも難問題だよ、平和會議の時期と場所は、未だ確定せぬ様だが、會議の結果は始めより多きを望む譯には行かぬ、先づ 第一、五年乃至十年を以て、世界列國休戰年と決議宣告す可き事。 第二、五年乃至十年の世界列國休戰年期間断然新計畫の陸海軍備擴張全廢を決議宣告す可き事。 第三、同休戰年間に葛藤を生ぜば、先づ交親列國の仲裁々断に附し、萬止むを得ざるに非ざれば成る可く雌雄を干戈に訴へざるを決議宣告す可き事。 是れ丈でも萬國協同の決議を成就し得たならば、世道民福に大益を興ふるは實に筆舌の外にあるが、是も始めからは往くまいよ、其所で最後に僕が創設の萬國平和順禮の計畫を話すが子、夫は先づ大體萬國平和

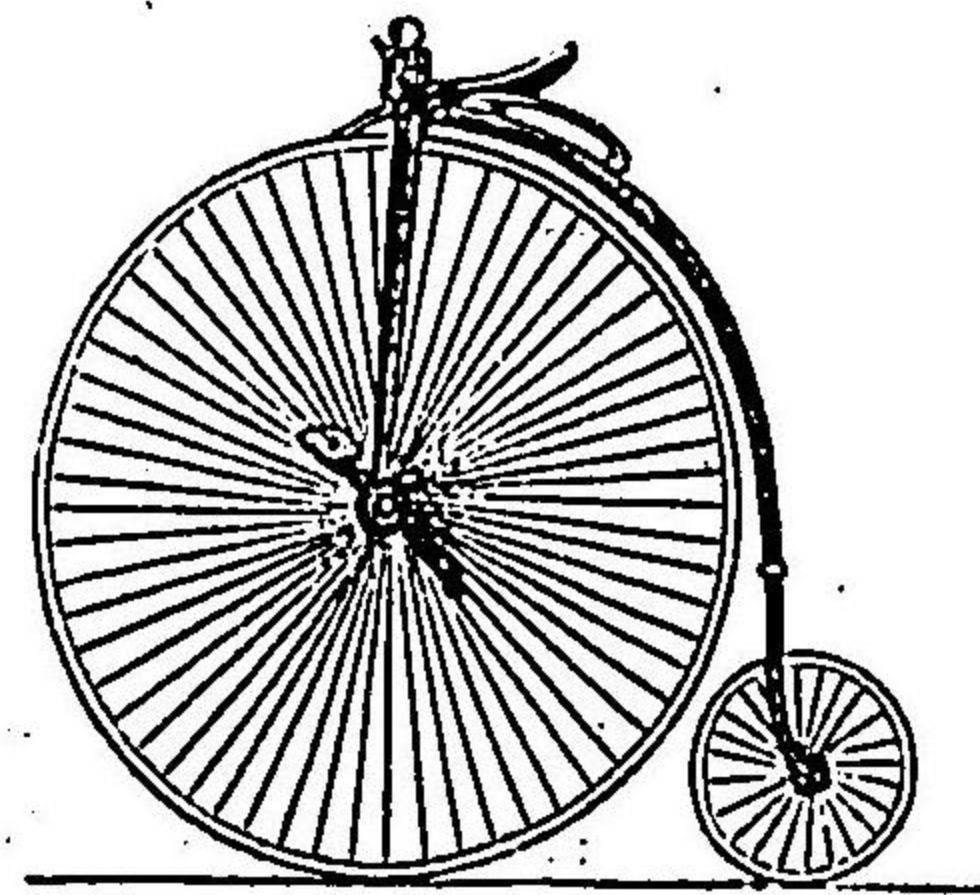


會議の開設に先だち、普ねく是を世界開明の列國に通牒し英、米、佛、獨、澳、伊、西、葡、其他の列國より委員を撰舉し、是等の委員を倫敦に集め、夫れより列國の首都を順禮し、帝王大統領を訪問して意見を叩き、最後に露都に參集して露帝に謁し、併せて平和會議開設の地に押しかけるので萬國平和會議に對する、社會人民の示威的大運動サ、見玉へ今に盛んなる一大運動が起るからチ、日本も世道民福の爲に、此萬國平和順禮に委員を出して呉れ玉へ、ナンダ極東悠遠海山萬里などの遁辭は驚くヨ、世界の日本など、云ふならば、少しは挑源の孤立を棄て、世界列國と同歩調の運動をするが好いぢやないか、君頼むよ、日本は平和順禮の委員を出さぬと云ふならば、せめては倫敦駐劄の公使に、同情を表する書狀を認めて貰ひたい、是を切に君に依頼する、唯話すだけは話して見ようなどは感服せない、君冷淡な顔をして棄て置かれては困るぞ、好いか子、公使の方は頼んだヨ、其代り僕の方の及ぶ丈は君を紹介斡旋する、グード、

「パイ、今朝は大變繁忙なのだ、又何時でも來玉へグード、パイ」  
辭して編輯室を出で、自ら外套を執つて被らんとさせる瞬時慌て、室を出で来るもの、例の蓄音チャッタ、ポックス氏「ヤ、是は失敬、是は失敬」慌て、外套を余の手よりモギ執り、是を背後より被せながら「ヤ、是は大に失敬であつた」余輩外套を着し了つて、一禮を述べんと後方を顧みれば、チャッタ、ポックス、浦島子の玉手箱と一般、早くも雲霞と消え失せて影も形も……ソ、ツカシキ男なる哉、是れでは露先帝をヂスミツスせしも其等、又露國受賄の嫌疑をも受け兼ねまじと思はれぬ。



大英國漫遊實記終



明治三十三年四月廿九日印刷  
明治三十三年五月 日發行

定價金七拾錢

著者 水田 榮雄

東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者 大橋 新太郎

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷者 佐久間 衡治

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舍第一工場



發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館



26/10/37

慶應義塾々長鎌田榮吉君著

### 歐米漫遊雜記

全壹冊 洋裝四六版 紙數五百頁

▲正價金四拾五錢 郵稅八錢

著者往年歐米に遊ぶこと年餘其歷程の廣汎なる、其觀察の細微なる他に其比を見ず、隨觀隨録したるもの今之を一巻に收輯す、英米獨佛露伊其他各邦の文物典例國勢は勿論博物館美術館劇場著名なる建物舊趾名蹟等仔細に叙述して餘蘊なし、加ふるに著者が齎らせる珍奇なる寫真十數葉を挿入す、最近歐米の旅行案内として必讀の新書なり。

發兌元 東京日本橋區 本町三丁目 博文館

第廿壹版發行

口寫眞銅版密圖内 地名勝數十景入

川野 志賀 重文 序君

### 改正漫遊案内

次目  
 △鐵道案内 △名所及温泉海水浴 △東海内道のの △山陽道のの △東山道のの  
 本書は紙數四百四十餘頁にして著者實歴の筆に成る各地名勝を案内するに詳密なり旅行漫遊者に缺くべからざるの書なり今や漸く旅行に可なる候此の一本を携へたるべからざるなり。

第廿壹版發行

全壹冊 袖珍美本 正價四拾錢 郵稅六錢

侯爵黒田長成君題字 子爵長岡護美君題詩 男爵末松謙澄君序文 大橋乙羽君著

其他諸大家序

### 賜天增補 千山萬水

全壹冊 洋裝 紙數七百餘頁 美本

第七版 綴内東海東山道 風景寫眞百二十 及中國四國九州

▲正價金五拾錢 郵稅拾錢

本書は辱くも 九重の御覽を賜ふの榮を得、發售以來忽ち第七版を重ねるの運に會したれば、更に大増訂を企て四國九州中國一帶の案内記六十四頁と其地の風景寫眞三十二ヶ所を加へ、且つ旅人智慧の板てふ新遊戯をも挿みて、初版以來紙數百五十餘頁を増加し、一層釘裝を美にしたらば、之に優れる旅行案内はあらざるべし。

發兌元 東京日本橋區 本町三丁目 博文館

侯爵伊藤博文君題字 壘屋重井君序文 伯爵土方久元君題詩 大橋乙羽生著

### 賜天續補 千山萬水

全一冊 袖珍 美本 紙數七百餘頁

▲正價金五拾錢 郵稅拾錢

第參版 寫眞銅版 色刷風景百二十挿入 東洋古來第一の美本として内外の喝采を博したる千山萬水は、其の紀する所の地、東北に止りしを、烟霞癖は更に著者をして、東海綴内中國西海より薩諸州を跋渉せしめぬ、是に於てか此の續編あり、之を初編に比するに、經る所廣きに從ふて寫眞に上れる絶景又頗る多し。裝幀の美麗亦優るとも劣ることなし

發兌元 東京日本橋區 本町三丁目 博文館



田山花袋君著

# 南船北馬

全登册洋裝  
袖珍内地名  
勝風景寫真  
銅版入

正價金四拾錢 郵税六錢

隨處に感興を作り到邊に詩想を著するは花袋氏の紀行文なり。ことに予は暗勝の見に富みて殘山剩水處として至らざるなく、處として探らざるなければ、その紀行文には珍談奇話百出して、或は溪村の夕、或は深山の夜、或は怒濤岩を嘯むの邊、或は山中の湖畔など、他の紀行文には見るべからざるの妙あり、編中志摩巡り熊野紀行の如き其の精彩の躍々たる真に一幅の寫真圖なり、山水の癖あるもの、自然の哀に懐かれんとするもの、世に不平を抱けるもの、皆一讀せよ、必ず得る所慰めらるゝ所あらん。

發兌元 東京日本橋區 本町三丁目 博文館

男爵楠本正隆君題辭 男爵末松謙澄君序文  
尾崎犬養其外名家序文 西島貞爾君著

# 實清國一斑

全登册洋裝  
袖珍美本正  
價金廿五錢  
郵税六錢

著者清國に游學すること五年、吳越を跋渉し、江漢を上下し、其風土人情の細微を探究し、深く内勢の如何を視察し、蒐錄此編をなす、今や東亞の風雲漸く急に、歐西列強の陸梁、日一日も其の歩を進め、漸く死活的の危機に瀕するは清國の現狀なり。利害得失の關聯する處、本邦人士たらんもの、何人も其真相を知らんと欲する所、此書能く老滯帝國の實情を悉くして餘蘊なし。

鐵脚坊 岩本千綱君著(寫真版口繪入)

# 三國探檢實記

全登册菊列  
正價三拾錢  
郵税六錢

本書は岩本氏が暹國を出發して安南國の内、地を跋渉し、其里程一千五百里此間幾百の危難に接し、萬死を冒して、風俗政教商工等を觀察し來れる實記なり、一たび本書を讀くものは萬感胸を衝き悲喜交も起る、正交無比の珍書なり。

理學士佐藤傳藏君著

# 日本新地理

全登册洋裝  
菊列紙數三  
百二十餘頁

正價 上製金五拾錢 郵税拾錢  
並製金卅五錢 郵税八錢

本邦の天然地理、人事地理、地方誌の三項、嶄新の事實に據り、確實の統計を本とし、巧妙の組織、簡潔の敘述、意到り筆隨ひ、説き盡して餘蘊なし、彼臺灣と北海道とに至ては立論奇抜にして、説明詳密、中等教育の参考書教科書として、世上他に其比類あるを見ず、本邦に生れて、此邦土の何たるを知らんとするの士は、請ふ一本を購讀あらんことを望む。

發兌元 東京日本橋區 本町三丁目 博文館

理學士佐藤傳藏君著

# 萬國新地理

全登册洋裝  
菊列紙數三  
百餘頁

正價 上製金五拾錢 郵税拾錢  
並製金卅五錢 郵税八錢

嗚呼萬國新地理生れたり、何か故に生たるか一般人種に向つて、新地理學の要領を語らんが爲めなり、最新の統計、最新の事實、最新の仕組を中等教育に向つて、大に告ぐる處あらんが爲めなり、亞細亞一支那—朝鮮及南洋—は本書の骨髄なり特色なり、來つて寧馨兒を見よ、日本新地理の良兄弟好姉妹たる此萬國新地理を見よ。必ず本書の特色に就て、其眞價値に就て、悟了する處あるべし。

發兌元 東京日本橋區 本町三丁目 博文館



理學士佐藤傳藏君著

### 五中等教育 日本地圖

全壹册洋裝 正價四拾五錢 郵稅六錢

本圖は嶄新なる趣向を以て編成す、其精確なる素より論を俟たず、且其十二頁の寫真銅版は鮮麗精緻、俱に全國各地の風景、産業の情況等を描出し、學生をして活ける地學的智識を得せしめんとす。

理學士佐藤傳藏君著

### 再中等教育 萬國地圖

全壹册洋裝 正價金六拾錢 郵稅八錢

本圖は舶來原書の精圖によりて萬國の形勢山嶽河海の地圖細大洩らさず編纂したるもの管に鮮明なるのみならず其記名の確實詳細なるは固く保證するものなり。

發兌元

東京日本橋區本町三丁目

博文館

野崎左文君著

### 日本名勝地誌

正價

壹册金參拾錢  
七拾五錢  
拾錢  
郵稅一册八錢  
○拾二册前金三圓四  
○六册前金壹圓

#### 次 目

- (1) 畿内
- (2) 東海道(上)
- (3) 東海道(下)
- (4) 東山道(上)
- (5) 東山道(下)
- (6) 山陽道
- (7) 北陸山陰道
- (8) 南海道
- (9) 西海道
- (10) 北海道
- (11) 琉球
- (12) 琉球臺

全部拾貳册洋裝美本

發兌元

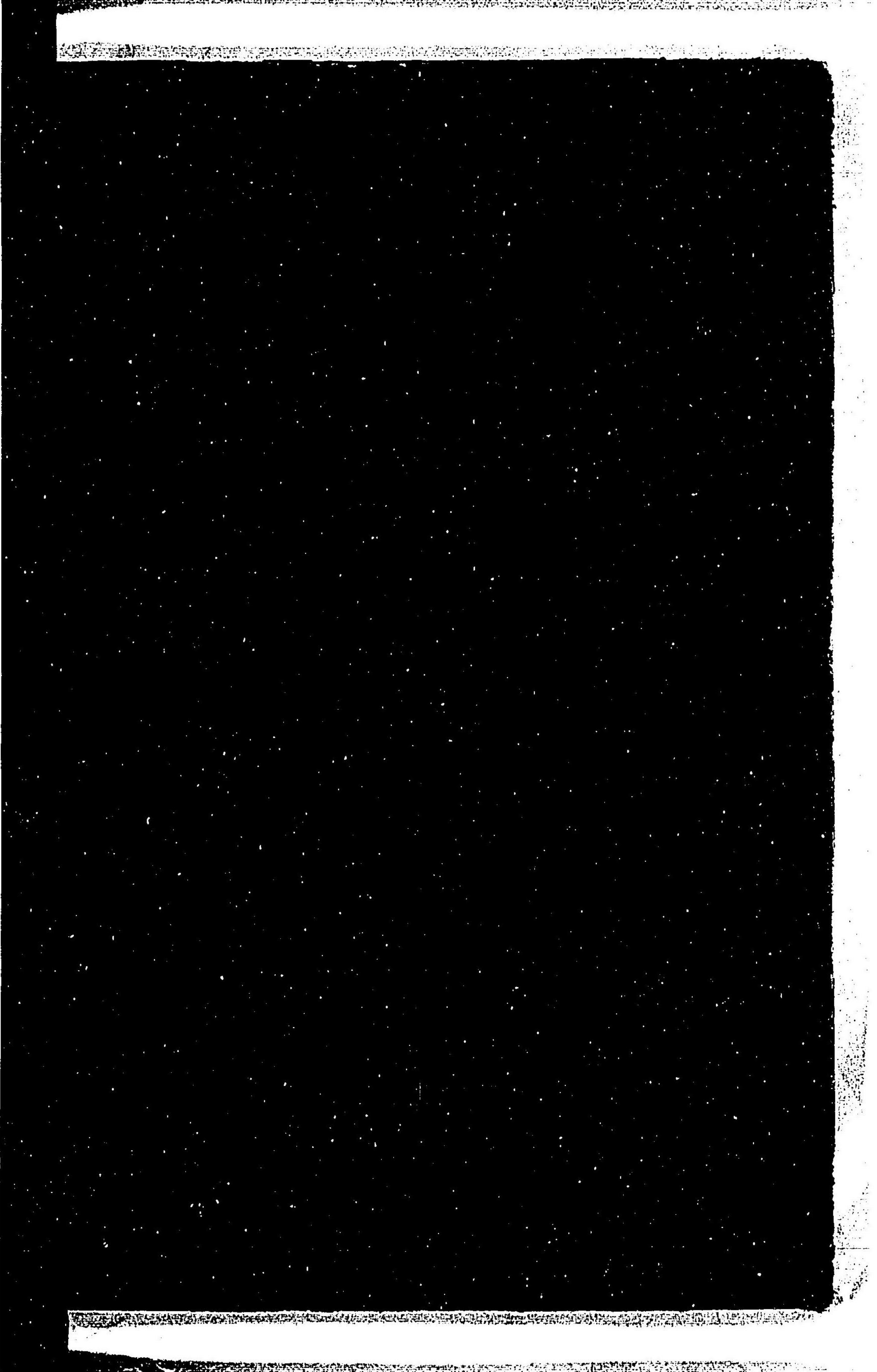
東京日本橋區本町三丁目

博文館



85
151









026846-000-3

85-151

大英国漫遊実記

水田 栄雄/著

M33

ADF-0027

